特105
243

神戸又新日報
掲載小説

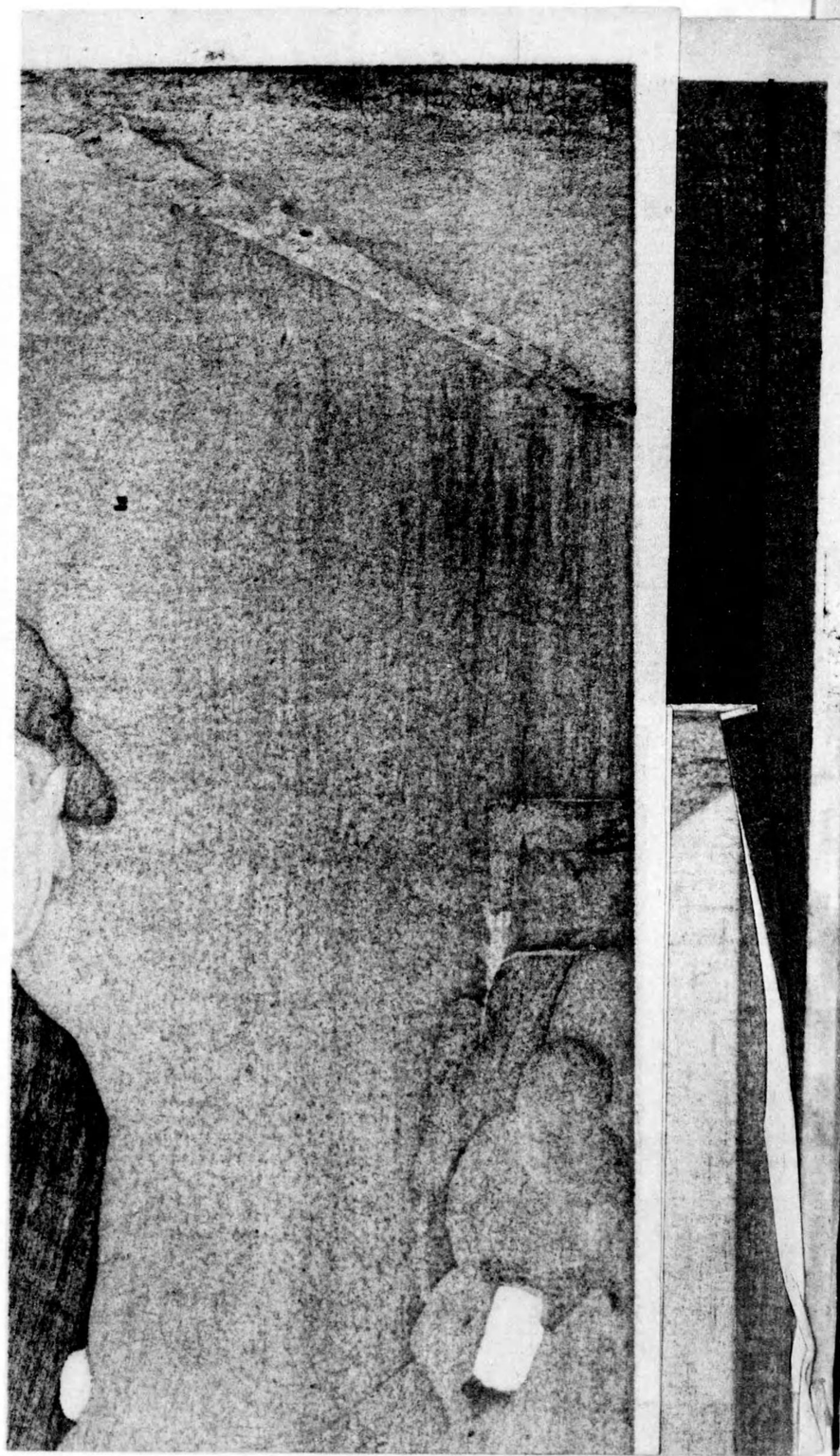
男（をとこ）

【續編】

山羽
本様
英荷
春香
畫作

大正
3 3.20
内交

始



樋口隆文館新刊小説目次

渡邊默禪作　千枝子
同　人作　封人窟
同　人作　侠妓
同　人作　小鶴
同　人作　千里眼
同　人作　風流菩薩
同　人作　櫻井一策
伊原青々園作　迷ひ子
島村抱月譯　其の女
鹿島櫻巷作　戀の敗者
同　人作　海の豪傑
新田靜灣作　愛と財
同　人作　富の力
伊藤銀月作　予……
根本吐芳作　三人の仇
羽樣荷香作　男……
須藤南翠作　浮木舟

須藤南翠作　闇のうつゝ
山田松琴作　操競べ
和田天華作　戀の意氣地
同　人作　靜子
同　人作　浪まくら
同　人作　二人の女
安岡夢鄉作　罪の子
同　人作　地獄谷
稻花生作　金齒の於墨
中村兵衛作　父なき子
同　人作　甚九郎稻荷
五竹園作　香形人
小島孤舟作　梅花錄
同　人作　浪がしら
花冠者作　思はぬ戀
春秋園作　俠妓胡蝶

樋口隆文館の出版物は東西各地の新聞紙上にて多大の好評を博したる物に付これを讀んでも至極面白い

男〔續編〕

（一）

羽様荷香

口を極めて罵つた音藏は返答聞うと詰寄つた、血相變つた彼の樣子は平生とは全く別人である直也は机に倚れて深く俯向いた儘一言の答へもせぬ。

『お前さんア學者さね、難しい字が讀めたり小説が書けたりするんだから豪い學者に違ひなからうが、學者仲間の人情ッていものア俺ら下等社會とは違うのか、それがお前さんに聞きていのだ、俺[illegible]の仲間ぢやア弱い奴は飽くまで助け、日借りの俥料を出し合うて客を讓る規則もあらア、老俥夫の俥は競走ぬ樣に後から押して遣る同情は轅棒握る徒輩でも皆な心得て居るんだせ、それをお前さん達の目から見たら定めて算盤に合はぬい、馬鹿な事だと嘲うだら

うが、持ちつ持たれつ渡つてこそ人情の嬉しい世界と思ふんだ、此考へが違つてるか、お前さん達の理屈が可いのか、學者のお前さんに敎はりていのだ』

『……』

『オイ榊さん默つてるのは人に喋舌らして置いて、お前さん又小説を考へてるのぢやアあるめねね、馬鹿々々しいや、お前さんに眞實の小説なんか書けッこは無いから置きねいッて事よ眞實の小説が書きたけァ眞實の人情を知つてからの事にしねねはッはゝゝゝ』

『眞實の小説といふかッ』

直也は面を上げた、充血した顏は感情の昂奮るを示す、詞も激しう響いた。

『左樣さ、嘘の小説百萬篇書いたつて錢儲けにアなるだらうが、お前さんの心に濟むめいが、人を救うの助けるのと筆先ばかりで書くよりア、正味生きた人間を……お前さんに取縋る生きた両つの命を助けてこそそれが眞實の小説になるだらうぢやァ無えか』

『眞實の小説といふかッ』

と直也は再び同じ詞を繰返した、其時勝手の方からバタ〳〵と駈けて來たのは喜作の女房で。

『先生樣ほゝほゝあの滅法けい美くしい女さんが先生樣に遇ひたいつて來ただ、これ渡して

呉れつてね』

『女が？』

と直也と何とはなしに驚いて膝を立てた出された小さな名刺を讀むと、顏色は急に變つた。

『通すだかね』

『イヤ……』

『不在といふだかね』

『ま、ま一寸待つて下さい』

と尠からず當惑した風、音藏も自棄ッ腹の權幕を一寸挫がれる、美くしい女といふ事が人々の胸にそれ〳〵違つた感情を有たせる。

『ウン可しッ、此室へ通して下さい構はんから』

『ほゝほ通すだね』

と妙に笑つて行つた後。

『音藏、暫時待て、客があるから待つて呉れ』

『俺ァ此處は金輪際動かねいから左樣思ひなせい』

襖の外に衣の音『御免なすつて』と艶めく聲で姿を現はしたのは、煤と塵埃に黒ずんだ農家の一室に、反古に散した朱一點、華やかな藝妓風俗の美人は、巽邸の招待會の夜計らずも直也と相識つた清香であつた。

『此處が知れたですか……突然に來たんですな』

と直也は混雜した挨拶をする、音藏は目を瞬る。

『お所書を倚つてね、だけど夜は大變ですわねね』

『君達が來る所ぢや無いです、座る所も無いが』

『萬望其儘……お客樣ね』

『ナニ構はんです、僕の內輪の者だから』

『貴方失禮を』

と清香は音藏に會釋すると、音藏はクルリと彼方を向いた。

『先夜は飛んだ失禮を……』

『イヤ僕からお禮を云はなければならぬ始めて遇つた君に妙なお賴みをして實に苦しかつた、併し能く僕の名を秘して下さつた、それからあの……』

『榊樣構はなくつて』

と清香は音藏の耳を憚る樣子。

『可しい、些とも構はぬ、此者はあの事件に就て僕以上の關係を有つ人です』

『オイ〳〵榊さん、俺への返事は何するんだ、チョッお前さんばかりはいよいよ全く見違ゐた小說に一生懸命で世間の事ア一切緣を切つたといふ癖に、そんな艶ッぽい幕が出せれア……ヘン立派な小說が書けるだらうよ、そんなお前さんたア些とも知らねいで、先生先生ッて今頃ア巽の邸の地獄の底で坊樣が泣いてると思ふと……、エ、見損つたが殘念だッ』

（二）

音藏が直也を憤る詞の中に巽の邸の坊樣と云つたのが清香の耳には偖はと頷かれた。

『榊樣此お方もあの薫さんを』

『エ』

と音藏は思はず其顏を見る。

『左樣です、これは音藏と云つてあの小供の親の家の抱俥夫だつたのです、今は或事情があつてあの子供の母親に仕へて感心に保護を盡して居る人です……辻俥を曳いて病氣の夫人を世話して居るのです』

『まあ左樣……』

と清香は身に泌みるやうに感じた。

『……貴方がたは眞實に嬉しい精神の方ばかりねえ……妾達お恥かしくつて考へると御同席も出來ないのよ……』

斯云つて聲を低うした。

『榊樣妾お賴みを受けた薫さんから委托物があつて、それがお手渡したいばかつりに今夜參つたのですよ』

『委托物が？』

『坊樣から？』

直也と音藏は顏を見合せた、清香は帶の間から紙入を取出して其中から小さく折つた紙を取出した。

『これ薫さんのお手紙よ、妾彼時からお邸へ三度伺つて其度にあの喜代子樣の住居へ態と寄つて、二度目に漸と薫さんに遇つだのですよ、染々話なぞは出來ないから斯々と貴方から賴まれた事を云ひますとね、又連れてつて吳れ此邸を出して吳れッて妾散々困らせられたのよ。それでも結局には能く納得してね、そんなら手紙を先生に渡して吳れ、此手紙を見せたら先生屹度僕を連れに來るからッて、それは可愛いとも慘しいとも……』

涙を半巾で押へて。

『斯な稼業をして居ても邪氣の無い子供と人の眞實には身につまされて泣かされるのですよ、さ榊樣早くこれを御覽なすつて、その上で妾貴方にお賴みがあるのよ』

直也は手紙を受取つた、一片の紙は手に石よりも重かつた。

默つて讀む直也、氣遣はしげに覗く音藏清香も太い字を透す。

『フム』

と嘆息して直也は紙を疊んだ。

『榊樣、あの時伺つたお話では貴方はあの薫さんを救ふ事が出來ない事情があると仰有つたわね、妾その事情を聞せて下さいよ、それからあの薫さんね、あの方は誰のお子さんか、それ

を妾尋ねるとね、お父様やお母様の名を他人に云つたら殺して了うッておばさんが云つたから、僕殺されたら先生やお母様に遇ふ事は出來ないからッて泣く泣く秘して云はないのですもの』

『殺して了うッて？畜生ッ』

と音藏は拳を握つて起上つたが的も無う睨んだ眼から粒の涙がポロ〳〵零れる、それを拳固で擦ると矢庭に清香の前に座つて、掌を合せて疊に頭をつける。

『お前さん……お、お前さんその坊様を萬望助けて下せい、これだ合掌だ、榊さんが助けられねいといふ事情は、あの坊様のお母様と不義の疑を受けたからだつて云ふのだが……現在その奥様は今死にかゝつてる大病で一目坊様に遇ひたいと俺へお頼みだ、俺獨りの思案に能はねいから榊さんにお頼みすると、何と云つても肯ては下さらねい奥様の病氣は漸次に重る一方、味方と云つちやア一人と頼んだ榊さんがこれだから、誰を力も無い俺らだ、お前様は藝妓商買の人らしいが、人の眞實は身につまされて泣くと云ひなすつた詞が嘘で無いのなら、萬望その坊様を救ひ出して俺の手に渡して下せい、遇ひたいと仰有る坊様を見せたら、あの御病氣が癒らぬとも限らねいから……、モウ縋る袂と袖も無い俺らだ、合掌だ坊様を助けて

下せい』

『切ない事情とは推量して榊様に頼まれた時から他人事には思つてないのですがね、音藏さんとやら……苦しい勤めの妾達には人に云へない事ばかり……妾が今あの薫さんを連出して上げる譯には何も行かない……といふのはね、妾はあの喜代子様のお兄さんの佐藤男爵のお世話になつて居るのですわ』

音藏よりも直也が驚いた、薫を苦め大野夫人を苦める憎むべき喜代子、其喜代子の兄佐藤男爵と清香とが干係のある仲とは知る筈も無つたのである。

（三）

『それぢやアお前さんはあの喜代子の阿魔の兄信明ッて奴と……エイそれぢやアお前も頼まれねいッ』

音藏は絶望の聲。

『チエッ何奴も此奴も皆敵だ。三人限の世の中なら矢張俺らが……、努力が足りねいのだッて

署長さんの云つた事も……俺らにア此上の力は無いのだもの……』
と云ひながら悄々と立上る。
『音藏何處へ行く』
『何處へ行うと大きなお世話だ、お前さんを相手に喧嘩ァして居た所が始まらねい、斯な事で隙を潰して萬一かの事が奥様にあつたら、屹度坊様に遇はせると云つた俺の約束が果せねいから……お前さんは折角愚にもつかねい似非小説を澤山お書きなせいましよ』
『音藏さん一寸待つて下さい』
『お前さんにも用は無いや、喜代子の縁に繋るも同然のお前に賴んだところが役に立ねい、お前さんに親切があれア坊様にさう云つて呉んなせい、先生先生と慕つてる榊先生も口や筆先ばかりの同情は上手だが眞逆の時は御見物だ今に音藏が暴れ込んで迎ひに行くからそれ迄待つて居なせいと……』
『音藏さん妾薫さんを連出して上げませうよ』
『エッ』
音藏はッカ〳〵と後へ戻る、清香を屹と見下して。

『坊様をお前さんが……連れ出して遣ると云ひなさるのかッ』
『妾あの喜代子様と同腹に見られちやァ意地が立ないから何にかして薫さんを連れ出してお前さんに渡して上げませうよ』
『そ、それァ眞の事ですかい』
『知れた時ア破れかぶれさ、佐藤さんと其爲に氣拙くなつたつて構はないことよ、お前さんの嬉しい精神には妾全然感心したから何とか骨を折つて見ませうね、女の一念ッていふからねえ、併し連れ出した後は其儘では納まらないわね』
『後の事なざァ考へて居られませんや、早く奥様に遇はせていばつかりでさ』
『だつてあの喜代子ッて人は普通の女ぢやありませんよ、妾達さへ舌を捲く程恐ろしい性根の方だから、子供を奪られた返報に何な事をするか知れはしない、それが御病氣の薫さんのお母様に障るやうな事があつては又お前さんの苦勞が増すのだから、其邊を能く考へて拙手を打たないが肝腎ですよ、それに付ても聞きたいのはあの薫さんの親御と云ふのは一體何な方達か、音藏さん妾は稼業の上の一番の秘密まで打明けて云つたのだから、お前さんも話して下さい、妾の精神が解つたらね』

『人が知る程恥辱だから隠した上にも隠していのだが親切なお前さんに包み立は出來ません、あの坊様のお父様は以前民友黨で評判の大野廣之といふ代議士で……』

『エッあの大野さんの……』

清香は廣之を知つて居る段では無い、寵客たる信明の座敷で顔馴染といふばかりでなく、信明に頼まれて染次といふ女を周旋つたのも自分である、其他に信明が酒色の餌で廣之を深い陷穽に誘うた時それらの魂膽を知らぬでもなく信明の爲に骨を折つた事は屢有つた、その大野代議士の夫人や小供の爲に今は計らずも同情の涙を濺ぐ廻はり合せにならうとは！。

『あの薫さんが大野さんのお子達で……それでは御病氣といふ方は大野さんの奥様で被居るのね……まあ左様ですか……』

『事の起因はあの佐藤男爵の野郎……お前さんの前ちやア云ひ憎いが、あの男爵が大野家へ來る様になつたのが不運のつき始めで、旦那は全然變つた人になる、長い間の民友黨を脱めて了つて巽伯爵の腰巾着になり、從來の眞面目に引變へて青樓酒に入浸り宅を外の不品行が續き、果は何一つ缺點の無い奥様に有う事か家庭教師の此榊さんと不義密通の難題かぶせて坊様を榊さんと引離すばかりでなく、奥様を無理から逐出した其後へは、今度は信明の妹の

喜代子が乗込んで、今ぢやア夫婦も同様さね、佐藤兄妹に崇られる大野の家は仕方が無えが理を非に曲げられて難義苦勞をしなさる奥様や坊様を俺が命にかけて護らなけれア誰も力になる人は無いのだからね』

清香は俯向いて聞いて居たが、自づと催さるゝ涙を拭うて。

『音藏さん能く打明けて下すつたのね、それで事情が能く解りました、さう聞けば猶の事妾屹度あの薫さんをお前さんに奪つて上げませうが……ナル程そんな譯なら榊様は此件の相談はお謝絶になるのがこれは道理だわねね』

『だつてお前さん……可愛相な奥様や坊様にアこれぞといふ味方は一人も無いのだから……』

直也は默々として机に倚つて居た、両人の話は耳に入らぬ氣勢である……眼は堅く閉ぢて双の手には髪を引掴んだ、身動もせぬ姿を音藏と清香は凝視て坐つた。

（四）

直也は夢が覺めたやうに目を開くと急に机から身體を起した、そして沈着いた聲で。

『音藏ッ、僕の身命を捧げやう……大野夫人母子の爲に……』

音藏も清香も默つて其顏を眺めた。

『音藏ッ、君に感謝する、眞實の小說を描けと云つて吳れたのを感謝するぞ』

『へイ……』

『榊樣……』

と兩人は右左から詞の意味が解らず疑惑の語調で覗き込む。

『嘘僞だ、嘘僞だ、俺の描いて居た小說は悉く嘘僞だ』

直也は誰に語るとなく銳い聲で云放つ、其眼は机上に積んだ『愛』の原稿に注ぐ。

『ヱ、嘘僞の結晶だッ』

力を籠めた手は紙數の厚い綴りの上へ烈しく落ちた、と指は猛獸の牙咬む樣に掴めるだけ原稿をグサと掴む。

『斯な物は何にもならぬ……音藏ッ能く士足にかけて吳れた、さあ踏んで吳れ踏み蹂つて吳れ……この原稿は君の云つた嘘僞の小說ぢや……嘘僞の結晶ぢや』

サッと兩つに三つに四つに、裂いた原稿紙は疊に投げ付られた。

『あれそんな事を爲すつては……』

『旦那、そ、そんな事を……』

音藏も清香と共に呆氣にとられたが漸と制ゐに寄る。

『榊樣短氣の事を爲すつては……』

『イヤ短氣ぢやない、僕は自分の過失を發見したのぢや、モウ斯な物は要らぬ、さあ音藏ッ、これからお前の希望通り大野夫人母子の爲に力を盡さう、何處までも相談相手になるぞ』

『旦那……』

と音藏は直也の前へベッタリ疊に頭をつけた。

『……旦那……先刻の雜言は萬望……萬望御勘辨なすつて……』

『イヤ雜言ぢやない、君に僕が感謝しなければならぬ、清香さんも聞いて下さい』

と直也は爽然たる態度で改まつて語る。

『僕は實に誤まつて居たのだ、大野夫人と不義の寃罪を被せられた、それを雪ぐには夫人の爲にも僕の爲にも互に何の交渉も無い……全く知らぬ人の如くになるのが一番良いと思つた、殘酷な人々の手で虐待る丶夫人母子の消息を聞く度に、ア丶可愛相だ……何かして救ひたい

……相談相手になりたいとは決して思はぬぢや無つた……殊にあの薫といふ小供は……あの少年を忘れた事は今日まで一日も無い……其爲に僕は苦しい煩悶を續けて居る……その爲には厭な思ひを忍んで巽伯爵の招待にも應じた、少年が伯爵の邸内に居ると聞いて他所ながら見たい爲に進んで巽邸へ行つた……僕はそれ位ゐ夫人母子に同情はしながら……一方では其同情を制へやう堪ねやうとして今日迄來た、……其精神は實に卑怯ぢやつた、音藏、この精神が君に恥かしい……』

大野夫人母子に遠ざかる事は即ち夫人の利益である……とはまことに體の可い遁げ口上ではないか、其道理らしい詞の裏には汚ない卑怯が宿る、自分だけを全うして人の零落に關係となるまい邪慳な智慧の働きではないか、嘗ては魂を打込めて其教育に努めた少年薫が痛ましい運命に虐遇れて居る事を眼前の事實に見ながら、飛込んでそれを救ふ事を得せぬのは自我といふ算盤を有つからではないか、あゝ『自我！』、汝榊直也が文藝道德上の信念……既に世に示し又示さんとする小説の生命は何か、自我を沒した無邊廣大の愛の發揮、そこに人間の靈の威嚴を歌ふのが汝の作の生命ではないか、自我主義を卑し醜しとして犧牲の愛精神の愛を叫ぶのが汝の作の主人公では無いか……斯く詰る聲あらばいかに。

『人を救うの助けるのと筆先ばかりで書くよりは取縋る両個の命を助けてこそそれが眞實の小説になるだらう？』

音藏の罵倒は醒覺よの鐘と胸に響く、『自我』を敵とする聖者の尊きを望みながら『自我』に捕へられて居た淺ましの理智よ……。

（五）

『清香さん、僕ア君の精神に對しても慚愧に堪へんのぢや』

と直也は其方へ向き直つて。

『僅に一夕の、それも遇ふてスグ別れる暫時の對面にあの少年が君の袖に縋つて同情を乞ふたそれに對して君の情がそれ程に美しく動く……佐藤男爵との關係を犧牲にしても少年を救はうといふ決心は……僕の執つて居た方向とは雪と墨ぢや……醜業婦……僕ア君方を身體と共に精神も汚れた婦人と思つて居たが……其君から僕は敎られた、僕は音藏と君に感謝しますぞ。

『あれ榊樣そんな事を仰有ると妾消ねたい樣ですよ、あの大野さんには妾……稼業とは云ひながら佐藤さんの力になつて眞に良心に濟まない事も爲たのですもの、今度の事で罪滅しになれば何なに嬉しいか知れません……』

と嘗て男爵の相談に乘つて廣之を苦しめた當時の事を思出して清香は切ない罪惡に顫ねた。

『旦那、それぢやァ俺の爲た亂暴を勘辨なすつた上奥樣や坊樣を眞實に助けて下せいますかッ』

『眞實だ……眞實だ……眞實は總ての最上ぢや……これから僕ア一切の虛僞を捨る、眞實の小說を描く前に先づ眞實の人となるのぢや、……何でも來い、迫害も侮辱も來い、寃罪も中傷も來い……眞實の前にそんな物が何だッ、音藏安心せい、榊直也が屹度大野母子を救ふて遣るぞ』

『榊樣貴方々の勇ましいお仕事の中へ是非妾を加れて下さいませ……眞實が總ての最上といふお詞は虛僞りの世界に住む妾の心を奇麗に洗ふ樣でございます……妾……從來の罪が滅ぼしたくなりました……』

清香は疊に手をついた、美くしい鬢の毛は細かに動く。

『無論君の手が借りたい、音藏と僕ぢやァ男ばかりで不便ぢや、恰度君が巽の邸へ出入するのは幸ひぢや、不幸な少年を保護して遣つて呉れたまへ』

『三人が……三人が力を合はせるのでございますかッ』

と云つて音藏は嬉しい感情の極みを男泣きに泣き伏した。

『これからは君ばかりに苦勞は爲せんぞ、併し此事業は却々困難ぢや、夫人母子の急を救ふた上あの大野廣之を救はねばならぬ』

直也は暫時默想に沈む。

『大野をでございますか、旦那彼人ア絶望でございます、モウ性根がスッカリ腐つて了つたからね、巽伯の乾兒になつて今ぢや金儲けばかり……乃公ア鬼になるッて俺へ云つた位ゐでございまさ』

『その鬼に念佛を唱へさせるまで僕ア行くのぢや、夫人母子を助けるといふ意味は即ち大野廣之を救うことになる、さうならなければこの事業は無意味ぢや』

と云つた直也の眼は輝く。

『墮落した大野廣之を救ふて夫人を引渡す、以前の平和な家庭に回復させることといふ事がお互

ひの事業の目的でなければならぬ、この直也は心命を捧げてそれを遂げる、君達も其心で加勢して呉れたまへ』

『旦那……俺ア嬉しくつて……夢の樣でございます』

『榊樣、何な事でも貴方から指揮して下さい、妾も命がけ屹度働いてお目にかけますわ』

『俺の命ア巽の邸へ暴れ込んで坊樣を奪り返さうと思つた時から投げ出して居るのでございさ、危ぶねい仕事ア俺が引受けます』

『ウムこれア愉快ぢやはッはゝゝゝ』

と直也は心から禁めぬ哄笑をした。

『嘘僞の小説を描くよりア眞實の事業が愉快ぢや、君達の尊い同情の赤誠に僕が立派な花を咲かせて見せるぞ……さア斯相談が極つたら仕事の役割を拵へる必要がある、清香さん、君は巽邸へ入る便があるからの、少年を保護して下さい、場合に依ては密かに連れ出すとも其點は君の所置に任せる、遇ひたいといふ夫人は僕が能く慰めて時機を待たせるから、それから音藏、君は從來の通りに夫人に附添ふて介抱して呉れ、病氣を愈くするのが何よりの急務ぢや、僕が遇ふて能く說いたら賢い夫人ぢやから病氣の上にも屹度善い結果が見られるだらう

其次には僕の任務ぢや』

百千里の山河踏破る旅行者の、希望遙けき長程の出立時に臨んで、草鞋の紐引締め力足踏み鳴らすそれの樣に、直也は躍る意氣を拳に籠めて机をドスと叩つた。

『僕は大野廣之に當る、彼が降るか我負くるか、正が勝つか邪が破れるか……』

云ひながら起上つた直也の顏には神佛の姿の尊い崇高さが籠る、音藏と清香は思はず敬虔の心で仰いだ。

（六）

綾子の病ひは日と共に勢ひの加はるばかりである、輕い初袷の姿行交ひ外は鳥の轉づる樣な人聲、輕快した夏の訪れは巷の物音までが爽やかに聞える、それを聞くまじとする樣に蒲團を暗く引破つて綾子は病よりも辛ひ快惱に日夜を泣いて送る、痛い腦は休みなく刺戟されて病勢の輕くなる道理も無い。

『お母樣……お母樣』

と呼ぶ病人の聲に、流し元に居た母は急いで枕引へ來る。

『音藏はまだ歸りませんか』

『まだゞがねえ……』

音藏は昨日劇しい雨風を衝いて俥を曳かず出て行つた限り今に歸つて來ぬのである、それが綾子には憂慮れてならぬ、無理と知りつゝ薫に一目遇はせて呉れと賴んだ事を、あの律氣な母子思ひの音藏が引請けて種々に骨を折つて居ることは能く解つて居る、けれども巽の邸の奥深く喜代子の爲に監禁同樣の目に遇ふて居る薫を此方の手に奪はうといふ事は迚も音藏でも誰でも出來ることでは有まい、よし又一旦は連れて來られても直に取返さるゝのを拒む理屈は此方に無い、親父の自由である……。

と悲しい分別は能くつきながら、病の苦痛增して身も精神も今が終りかと觀念の眼を閉づる時

『お母樣……お母樣……』と我を呼ぶ聲は忽ち耳へ來る『薫……薫……』と夢現に抱かゝねる……抱ねた形に手を組みながら愛着の姿は消ねた夢……其時には掌を合せて『一目夢でなしに遇はせてお呉れ』と無理難題を合點しながらッイ音藏に賴むのである、賴んで置いて心の中で

『勘忍して』と弱い心を抱締る樣に身を悶ねつゝ蒲團の闇ね……。

『何したのだらうねねあの人が一晩も歸らぬといふ事は無いのに……』

『お母樣……妾惡い事をしました、あんな無理を……薫に遇はせてお呉れッてあんな無理な事を賴んで……あの氣性ですからその事で骨を折るのに違ひありません……あの人に此上あんな無理が云へた義理ぢやありません……あゝ妾何しませう……惡い事をしましたねね……』

『それは左樣だけれどねね、又あの人には考へがあるだらうから、世話をかけたお禮はお前さへ快くなつたら何なにでも出來るといふものだから……そんな事を又急に燃立つやうに心配しては可けませんよ』

『だつて妾……あゝ音藏濟ん事をしました、お前を此上苦しめて妾が安閑と寢て居ては濟みません……』

『これはお前、それが可けないのだよ、お醫者も左樣お云ひぢやないかね、憂慮を止めなければ藥を浴びたつて癒る病ぢやないと仰有る位だもの、さうお前の樣に掘立る樣にしては他から何程氣を揉んだつてお前自身に惡くするのです……お賴みだから氣を靜かに持つて腦を痛めぬ樣にしてお呉れ、さうしたら屹度癒るから』

『お母樣……妾身體の病氣が快くなつたつて……この精神の……此精神の苦痛は除れる時機は

ありますまい……精神の苦痛で何せ何時か倒れるのですもの……イツソ此病氣で死んで了つた方が優だと思ひますわ』

『あれ又あんな事を……死ぬるの倒れるのと緣起でもない事を云つてお吳れで無い、そんな事を聞く爲に妾介抱に隨いてはしませんよ』

と沈む心を浮かせたさ、態と强い詞で云つて。

『世の中が何程變つたつて眞理は一つです、お前がこれ程の大病に罹りながら實家の敷居を越さぬといふ眞實の精神が何時か廣之さんに通じないといふ事があるものかね、それが通じた時がお前の精神の苦痛が奇麗に除れる時ですよ』

『そんな時機は來ますまい、向ふは大勢の人が寄つて集つて……此方は僅た獨りの音藏ばかり……妾は此通り意氣地の無い……力といふ力は無いのですものねね』

寂しさ悲さしの冷たい涙が痩せた頰を傳つて枕を濕らす、母は搔拂られるやうな胸を押へて、何がな氣を轉させやうと毒にならぬ話柄を探す。

『御隱居樣ッ、奧樣ッ』

と突然に座敷を突拔く大きな聲。

『お音藏さんが』

『歸つて來たのですね』

絹子が立ちかける時重たい物でも下した樣な息遣ひで襖を引明け音藏が眞赤に汗ばんだ顏を出す、此頃に絕ねて見ぬ晴やかな笑みは目にも口にも。

（七）

『オ、音藏さん、貴方が歸つて見ねぬので大變な憂慮でね』

『音藏變つた事は無かつたかね』

と綾子は濕れた顏を上げた。

『奧樣、變つた事が大有りでございますぜは、、、、奧樣モウ泣く事ア要りません、此方の目が向いて來ましたよ』

音藏は獨りで會得で。

『百人力の味方が出來ましたぜ』

『味方が？、妾達の力になる人が……』

『ヘイ誰も彼も世間の奴ア一體に皆な弱い者虐めにかゝる中に、此人ひとりと俺が見込んだ豪い方を引張つて來ました、奥樣榊先生をお供して參りましたよ』

『エ榊さんを……』

榊の名を聞くと綾子は一時に涌きかへる感情に病を忘れて寢床の上に起直つた。

『奥樣、あの方位ゐ同情の深い…頼もしい方が今の世に有つたものぢやアございません、坊樣が子供心にもお慕ひなさるのは道理でございまさあ、だから俺ア何かしてあのお方の力を借りて奥樣や坊樣をお救ひ申したい」今日まで奥樣には内證で骨を折つた甲斐があつて榊樣が身に引受けて屹度以前の樣に納て遣ると仰有るのでございますよ』

『榊樣にその樣な事が……妾からはお願ひが出來ないものを……』

『奥樣そんな事を云つてる間に御病氣が重くなつたり坊樣のお身に萬一かの事があつたら何うなせいます、向うは大勢が腹を合せて企む仕事でございますよ、イクラ俺が焦心たつて迚も大野樣や喜代子の阿魔たア太刀打は出來ませんから、榊樣のやうな方を味方に頼んで、此方から打つて出なけれア駄目でございます』

『榊樣は何處に？』

『表に待つて頂いて居るので、奥樣に遇つてお話をすると仰有るので』

『榊樣が遇うて遣らうと仰有るの……それぢや早くお通し申して……だけど斯な所へ……』

と綾子は流石に此寂しい暗い生活の内面を其人に見せるには堪えられぬ氣がするのであるが、母子を思ふ同情深い人の訪問には病ひを忘れるほど嬉しいのである、一人では心細さを始終感じて居る母親も人懐しく。

『榊と云ふ方は坊の先生の？』

『はゐ薫が慕ふて居る教師の方ですよ、此方からお詫に出なければならぬのを……お母樣妾此上から羽織を着せて下さい、餘り失禮ですから……』

『萬望此方へ』

と音藏の案内で入つて來たのは榊直也である、巨きな體格を靜かに運んで、明けられた煤に黒い襖を入いると。

『やゐ』

と云つて彼は立すくんだ、暗い陰鬱な、穴の樣な坐敷に消え込む氣勢に蒼白い顔、それが美し

かつた大野夫人？、直也が頭腦の髓を抉られた心持で我を忘れてツカツカと枕元に進んだ。

『榊様……失禮を……』

と綾子も無量の感慨に詞は淀む。

『貴女は……酷い物に……遣られましたな……』

『はい……』

『これは酷い……音藏こんなに惡かつたのか』

『……へイ……この御容態で……旦那萬望奥様の御安心の行くやうに……』

『ウムそれは可い……』

と直也は削つたやうな頰から額を凝と眺めて居る。

『榊様……御深切に他所ながら訓へて勵まして頂いたお詞も……妾斯な意氣地の無い病軀になつて了つて、……お目にかゝる面目もございません……』

『イヤ貴女は豪い、音藏に聞いたです、今日まで大野夫人といふ資格を守つて御両親の實家へ歸らないで、斯な悲酸な境遇に甘じて居られたのは敬服です、痩せた肉は尊い犧牲です……その犧牲の前には何者も伏するでせう、この直也は只今から貴女方母子の味方ですぞ、御安

心なさい、僕の努力で貴女方を包圍む敵は片ッ端から降參させなければ置んから』

『有難うございます……母子の者にそれ程……併しあんな事情でございますから又貴方に御迷惑を及ぼすやうな……』

『はッは……それですよ、僕も實は長い間それに苦しんで居たですが、それは畢竟自分の意志が弱いのです、不義を疑はれて今迄は逃げて居たのです、自分ながら卑怯だつたのです、男として愧づべき卑怯です、これからの僕は進んで敵に當るのです、そして貴女方母子ばかりぢや無い、大野廣之氏を屹度救うて見せる大覺悟を此處に有つて居るのです、安心して早く快くおなりなさい』

と直也は胸を叩いた。

（八）

直也は急に東京へ歸ると云出した、驚いた喜作夫婦は我子を奪られる樣に嘆くのである。

『突然なもんだで薩張譯は解んねいが……ソラ何せ先生樣見たいな豪い方が斯な田舍に何時ま

でも居さつしやる筈は無い、書き物の用が濟んだら歸りなさるこんだとは思つて居たゞけどね、あの間骨を折つて書き上げたものを引裂くつて……先生樣氣イ違つたのぢやあるめいかッての』

『は、、、氣は違やせん、モウ彼な物は要らん事になつたです、今話した通り商賣變へをして小說を書く事は當分廢める決心だからね』

『それぢや先生樣何うして歸らつしやるのかね……それにしても今云ふて今日だ無いだつて可かんべい何だかチョックラと惜しまれる名殘で無い氣がしてのう』

『有難う……お夫婦の厚情は決して忘れませんぞ、樂しかつた此處の生活も忘れられるものぢやない……僕今度の事業さへ成功したら屹度又厄介になりに來るです』

『嘘をつく先生樣で無ねからそればかりが待つ的だよ、のうお陸』

『妾濟ぬ事だが先生樣宅の息子と同じう思つて居たゞからね』

『イヤ僕もお夫婦を親同樣に思つて居た……此處を去るのが宛然故鄕を離れるやうな氣がするです』

と云つて直也は懷かしい追懷となるべき田園生活と、肉親の情義を盡して吳れた老夫婦との別

れに催さるゝ哀愁に顏を曇らせた。

淚で見送る喜作夫婦と別れて直也が東京の町へ入つたのは日盛りの二時頃であつた、初夏の爽やかな日光に相應はしく活氣溢るゝ巷は彼の眼前に展げられた、白い洋傘が行き氷菓子屋が走る、これだけの人々にそれ〴〵の任務のある事を思ふだけでも混亂れた强い刺激を受けずには居られぬ、とある辻を曲る時高い家の横側にペンキ文字の色毒々しいのが正面の日光に輝き烈しく眼を射た、文字は土地動產賣買、金錢貸借周旋何々ブローカーと讀れた、直也は之を仰いだ時魔藥を嗅されるやうな氣がしてフラ〳〵と眩暈を感じた、洋杖をつき大きな風呂敷包を脇に抱えて織るが如き群集の大道を睥睨して立つた彼は、忽ちにして變つた我周圍の事情を人事のやうに今觀めて居るのであつた。

身を閑寂な田園生活に置いて靜に會心の小說を作る、それは昨日迄の我であつた今日は……今より後は？、我と目眩しい浮世の戰場に飛出した我の任務は？。

筆の曲折文字の波瀾……小說の上に試みた力を其儘に活きた人事の上に加へて我は重大な任務を成功させねばならぬ、その戰ひの門出を迎ふる市街の姿は、豆の花咲き胡瓜の實結る畑の土に鍬の頰杖して詩を案じて居た我をいかに迎へる市街の姿ぞ、日に輝くブローカーの廣告は窮

苦の世態を其儘に語る、馳せ交ふ人々の不安の顏色には險惡の人情が明かに語られる、この窮苦この險惡……癈て我を取圍む敵であらう、來れ敵？。

直也は陣頭に立つ勇士の勇躍を無して人を眺め町を眺めつゝ足を進ませた、嘗て下宿した神田の家へ志すのである。

一隊の車馬が塵埃の煙を捲起し往來の人々を仰がせつゝ來り過るのに遇つた、最先の自働車には巽伯と一人の紳士が乘つて居た、直也はそれを見ると急に顏を反けた、反けて地に落した視線を再び上に向けた時今度の一輛の自用車が例に遲れ馳せに飛んで來た、透幌の裡に『あ』といふ聲、直也はそれに氣付かず盛んに起つ砂塵に帽子を傾けつゝ大股に歩く後ろから。

『神木さん、神木さん……』

と聲を掛けつゝ今過ぎた車が後戻りをした、直也は美しい自用車の上から我を神木と呼ぶ女の嬌聲の誰であるかは早くも知つた、振向くと。

『佐藤ですよ』

と車から色の裾を亂して下りたのは果して喜代子であつた。

『先夜は失禮を致しましたわね、妾其後お詫旁是非伺ひたいと思つてお住所を聞いたのですけ

れど誰も知らないで眞實に失望したのよ、まあ、能く遇へてねえ、あゝ好かつたこと』

探し歩いてた物を漸を見付けた樣な仰山な物云ひをしながら馴々しく身を寄せる喜代子、默つて走つて去りたい心を殺して。

『イヤ僕が失敬しました』

（九）

花の令孃姿と肩聳やかせた頰面の壯漢が對ひ合つた立話の光景は往來の目を注めた。

『まあ厭だこと、皆な此方を見て、ほゝほ神木さん、貴方と妾と斯してお話をして居るのが變に見ゐるのでせうかねゐ』

『左樣ですか』

『ほゝほ左樣ですかッて貴方に問ふて居るのよ、神木さん貴方何方へ？』

『僕ですか……僕は今轉宅の最中だから何處へ行くとも解りませんな』

『あら彼な事を』

と喜代子は呆れた顏をする。

『轉宅ッて何方へお轉宅になるの』

『それがまだ確かに極らんのです、僕の意の向う所へ下宿しやうと思ふて居るので、今探して歩いてるのですからな』

喜代子は吹出す樣に笑つた。

『神木さんそれ眞實の事？、事實？』

『眞實かといふのですか、僕本人が證明する以上に手段は有ませんな』

『だつて……お荷物は』

『荷物？荷物ですか、荷物は僕自身が有つてる此身體とこの風呂敷包』

『ほゝほゝあんな事を……御氣樂だわねゝ』

『大した氣樂とも思はんですがね、別に苦痛も有ませんな』

『神木さん、それが事實ですのなら妾貴方にお宿を周旋しませうね』

『貴女が僕の下宿をですか』

『はゝ、可けないこと？』

直也は一切『我』を捨て夢のやうに此女と對つて居る、薫を救ふには此女に接近する事が最も妙である、大野廣之の消息を知るに、此女を捉へるのが得策である、有ゆる不快を忍んで暫時彼の爲る事を見て遣らうか……と夢の底で分別を決た。

『結構です、併し僕の樣な者の下宿に貴女は親近は無いでせう』

『下宿屋で無くても可いでせう、貴方向嶋ぢやお厭？、閑靜で小說をお書きになるには持つて來いだわ』

『はッはゝゝゝそんな贅澤な世界には僕們は緣は無いですよ』

『贅澤だつて何も要らないのよ、其處はね妾の別莊』

『貴女の別莊？、そんな所に僕は……』

『妾の別莊お厭？、些とも構はないのよ、妾今は巽の邸內に彼して居るのですからね、空家の樣にして番人だけ置いてあるのですわ、貴方の樣な方が來て下されば妾時々伺つて文學のお話なぞ聞かせて頂けるから本統に有難いけれど……神木さんお厭？』

と例の表情の鋭い目に後の詞を云はせる直也は縱橫に亂れる考慮の上に、冒險的に『遣つて見ろ』の英斷を下す。

『それァ有難いですな、僕の樣な者が行つても構はんけれァ實に結構です』

『構う構はんッて妾の別莊ですわ、貴方さへ來て下されば大歡迎よ、來て下さるの、まあ嬉しいこと』

喜代子は實際力を盡して直也の神木朱衣を探して居たのである、招待會の夜人に妨げられて折角の坐敷を中途に滅茶々々にされた、足らぬ雛子は彼時以來いよいよ喜代子に强請んで神木戀しの情を訴ふるのである、喜代子は其夜始めて遇ふた直也の朱衣を普通の文士ならぬ氣骨を備へた男と見て取り、雛子の戀の容易には叶ふまじきを知つたが、何事をも成就させる黃金の力の有り餘る令孃を本尊にして我智慧を絞つてか、つたら高が原稿料で飯喰ふ文士風情、百の朱衣も落して見せる、といふ强い自信を有つて頻りに其居所を求めて居たのである、朱衣と雛子の仲を媒介つたらそれが秘密であらうが公然にならうが何方になつても狂ひのない大金儲である、現に今當世虛榮の眞中を行く輝くやうな贅澤の費用は雛子のお守役として伯爵夫人から受取る手當の外に、密かに雛子へ戀の催眠術がけて貪り取る財貨である、今日直也に遇ふたのさへ寶の藏の鍵拾うた喜悅に加へて、別莊へ下宿の事まで忽ちに決したのであるから喜代子は我運勢の意ふが儘なる滿足に美しい顏を輝かせた。

（一〇）

大野廣之は鄕里山口縣に歸省する事になつた、彼が多年の主義主張を拋棄て巽伯に降つた報酬或巨きな物を受ける約束は實行の時が來た、底知れぬ地下の富？、山口縣周防長門の兩國境に跨る阿武鑛山、昔は藩領であつたのが今は巽伯爵の所有になつて居る、十年以前一度び廢鑛を傳へられたのが近頃某外人技師の研究でまだ掘り起されぬ富の莫大である事を確め得られ、復活した鑛山の事業は數ケ村の民の生計を助け現今盛に新式の設備を施して發掘に着手されて居る、この阿武鑛山……新なる鑛脈にさへ掘當てたら見當のつかぬ富を獲らるべき有望の鑛山に熨斗をつけて渡したのは巽伯爵である、之を受けたのは大野廣之である、その仲介をしたのは佐藤男爵であつた、凡そ三十人の代議士を誘致し議會に多數を占めた同志黨の勝利は偏に大野廣之の去就の爲であつた、で廣之を誘ふ爲には巽伯は此無限の富を期待さるべき阿武鑛山といふ大きな餌を惜まなかつた、果して廣之は之に動いて、動かすべき膳立は佐藤男爵が作つたのであるが心を魅んだ料理は巽伯が用意したのである、世上一切の毀譽を顧みず地下幾層の

黄金に執着し、節と名を捨て富と權とを獲んが爲に大野廣之は彼自らが云ふ如く全く生れ變つた人間になつたのである。

今度新に招聘した外人技師が來る、新式の器械が到着する、それらの爲に廣之は親しく鑛山に出張せねばならぬ用向が出來た、これらの資金は悉く巽伯が供給するのであつた、見込み通り掘當さへすれば廣之が此負債を償ふのは易い事であるが、伯の方では別に債權者の顏はせぬ、飽くまで、廣之を信用し寵愛して恰も親戚關係の樣な間柄に見せ、爲に今ではモウ廣之は伯爵の下を去るは容易に爲し能はぬ事になつて居るのである。

綾子を強いて放逐した後の廣之は小石川の家を疊んで老母と共に高輪の寺田の別莊へ引移つたのであるが、薫はそれと同時に巽邸に居る喜代子の許に預けられた喜代子と廣之との關係は薫をして母と呼ばしめるに相應しい事情になつて居る。

喜代子は二階の居間で鏡に對いて今起きた顏を化粧の最中である、階下では薫が朝の復習に冷しい聲を張上げる、其聲が筒抜けに聞ねると、鏡の裡の白い顏は美しい眉を一寸寄る。

『チョッ喧ましいッたら有りは爲ない、毎朝あれで起されるんだもの、厭になつ了う』

乳汁の樣な液を壜から掌に注けてピタピタと顏をたゝく、花の匂ひが鏡臺を繞る華麗なセルの

寢衣が立膝で流れて亂れた裾は艶めいた、眉に黑を入れる姿態は女優の如である。

電鈴に呼ばれて來た女中が手を突く。

『あんなに大きな聲をするのぢや無いと云つて……毎朝云ふぢやないか、叱つてお呉れ……』

『……坊樣は却々妾が云ふ位ゐではお肯入れぢやございませんもの……』

『お前の云ふ事を肯ない？、本統に詮術の無い兒だねね、口ばかり生意氣で……此處へ呼んでお呉れ』

と白粉まだらの顏を赤くする、階下から薫が杖に縋つて來た。

『おばさん用事？』

喜代子は見向きもしないで鏡の奥の小さな姿を睨んだ。

『何です其風は、起つて物を云ふといふ事がありますか、お座りなさい……』

『……おばさん用事？』

と痛い足を崩して座る。

『おばさん？、薫さんお前おばさんッて誰の事をお云ひだね、誰がお前のおばさんだね』

『……』

『妾をおばさんといふ事はならぬッて云つてあるのに、何故姉様とかお母様とか云はんのです
お父様もあれ程能く敎へて下すつたのに、本統にお前といふ子は些も妾の云ふ事を肯んのですね……妾お前におばさんなんテ云はれると此顏中が皺だらけになる様に……』
と身の毛が彌立つものに仰山な顏をして、
『オ、厭な事、お前の爲に齡を老らせられて堪るものかねほゝほゝゝ』
艶々しい顏を鏡に引付けて仔細に化粧の乘りを檢ながら。
『お前何しても妾を姉様ともお母様とも云ふ事は厭だとお云ひのだね……』
『僕嘘をつく事は……』
『ナニ』
嚙みつく聲、鏡の蓋を劇しう覆ふて喜代子は美しい恐い顏を正面に見せ向き直つた。

（一一）

『嘘を吐けと誰が云ひました、妾をお母様と云ふのが何故嘘を吐くことになるのです、お父様

は何と云はれました、妾がお前のお母様になるのだからおばさんと云ふ事はならん、お母様
と云へと仰有つたぢやありませんか、モウ忘れたのですか……』
『……だつて僕……僕お母様が居るんだから……眞實のお母様が……』
『お前ッ』
と喜代子の聲はビリ〳〵と震へた。
『まだそんな事をお前は云ふのかね、飽くまでもそんな事を云つて妾を侮辱するのだね』
取つて挫がん權幕でそろ〳〵と身を寄せる、薫は何時の通り頰を痛いものに平手で叩かれると
と其顏は能う見ずヂリ〳〵後へ退る。
『何邊云ふて聞かせたら解るのだねお前は、お前の從來のお母様はね、大邊な惡い事をしてお
前とお父様を捨て出て了たのだよ、可かね、そんな惡い惡い人だからね、お父様はモウあの
人をお前のお母様にはなされぬのだよ、それで妾がお前が可愛相でならぬからね、斯して引
取つて世話をして上げるのだから』
『お母様は惡い事を爲ないのよ、お父様が惡いのだから……僕能く知つてらア何も彼も能く知
つてるから』

『チエッ精神迄が不具者だねお前はッ』

と喜代子は手を伸して突然薫の横顔をピッヤリと叩つた、叩たれた薫は逃げ走しることの不自由な身を疊に俯伏てワッと泣く。

『喧ましいッ仰山な聲をして……優しくして可愛がれば乘け上つて……小供の癖に何も彼も知つて居るとは何といふことを云ふのです、何か妾達に惡い事でもあるやうに……お前は犬猫の樣に淫奔をしてお父樣やお前を捨た人が何故そんなに戀しいのです、お前のお母樣はお父樣といふ御亭主があるのに他の男と醜行を爲た人だよ、お前はそんな……そんな畜生見たいな人をお母樣にして恥かしくはないの、恥かしいとは思はないの』

『お母樣そんな事仕やしない』

泣きながら面を上げた薫は突かゝるやうな聲で。

『宅のおばあさんとお父樣が嘘を吐てお母樣を逐出したのだ……お母樣は惡い事は些とも無いから……』

『へッ知りもしない癖に生意氣な、現在お前の先生の榊ッていふ人と』

『榊先生がそんな事を爲るものかッ』

薫は一段聲を高うして。

『榊先生をおばさん知らないから……先生は惡い事は大嫌ひだもの、先生は惡い事は何な僅かなことでも爲ては可んッて僕敎はつたから』

『ほゝほ巧く母も子も籠絡だものね、それ位ゐの手腕が無くちや人の妻は盜めなからうから、お前もお父樣も皆な欺されたのたよ』

『先生人を欺すもんか、僕先生大好きだ』

『不義の相手を慕ふお前は矢張お母樣見たいに畜生だよ』

『僕畜生なもんか』

小供心にも極度の罵詈を憤り涙の顏を赤くして屈しない。

『ほゝほ畜生ッて腹が立つなら何故畜生見たいな人達を慕ふのです、お父樣や妾の云ふ事を聞かないのです、妾の云ふ事さへ聞けば……妾をお母樣と思つて云ふ事を聞けば妾何なにでも可愛がつて上げるからね』

威厭で可ぬので聲を優しうする。

『好きな物も買つて上げるし、何な事でも叶へて上げるからね、ねえお前能く考へて御覽、其

方が德だらう、妾お前を呵つたり叩いたりは決して爲たくないのよ、お父様に賴まれてお前を敎育しなければならないからね、お前が云ふ事を聞かねば詮術なしに酷い目にも遇はせるのですよ、可いかね、素々お前が可愛相でならないから妾から進んでお前を引受けたのだもの、呵つたり叩いたりする妾の心の苦しい事を少しは察してお呉れで無ければ……解つたかね、解つたら妾の云ふ通りにするのだよ、今日から妾をお母様と云つてね』

『何な事でも肯て呉れるの』

『エ、聞く位ぢやないわ、何か欲しいの買つて欲しいの……』

『お母様……』

『オ、お母様ッて云ふの？、ほゝゝお前がさうしてお呉れだと妾嬉しいわ、何？、何を欲しいの？』

『僕お母様と云ふから……』

『お母様と云ふから何？』

『僕眞實のお母様の所へ遣つて下さい』

（一二）

膝に抱上げた猫に咬みつかれでもしたやうに、驚きと口惜しさとが一緒に込み上げ喜代子は小さな姿を睨み据ゑて起上つた、眞實の母の許へ遣れ！、とは飽くまでも自分を母とし仕へるを拒む宣言である、嘘の母には從はぬといふ斷言である、エ、憎さも憎い小さな姿、この小さな姿が我に反抗する敵！、自分の事業を破壞せんと呪ふ敵である、と思ふとムラ〳〵起る憎惡の念は固く握つた拳を其頭上に打下さでは鎭まらぬほど、物に誇る負嫌ひの心に大きな刺戟を受け、血相變へて詰寄つた、鋭い爪の下に其身を壓へらるゝ暖め鳥の心で薫は小さくなる。

『小供の癖に……普通でも無い不具者の癖に大人を愚弄するのだね、お前が何時までも畜生の母親を忘れる事が出來なければ妾もお前を畜生扱ひにするから左樣思つておゐでなさい、階下の座敷から一寸でも出たら酷い目に遇はせるよ』

と云ひ樣半ば身を起しかけた薫を忌々しげにチャッと突く、突かれて蹌めいた薫は後ろの壁で頭を酷く打つた、けれども、モウ聲を上げては泣かなかつた、痛い所を押へて恨めしげに喜代

子を見る。

『お下りなさい？……』

『……僕、ぢやアお父様に遇はせて下さい』

『エ、まだ其處に』

と再び手のかゝらんとするに薫は杖を拾ふて階段を下りかける、其後姿を見て喜代子は『チョッ』と舌打して、今の憤怒にそゝけた髪を弄ふべく再び鏡臺に坐つた。

本邸の方から女中が走つて來て、喜代子に電話のかゝつたことを傳へる、夫は廣之からの電話で、例の所へスグ來て呉れ今夜の急行汽車でいよ〳〵旅行の途に上ることに決つたからとの事であつた、喜代子は眩いやうな盛裝で、例時よりは格別に化粧を凝した美しい姿を車で外に運んだ、青嵐を乘切る眞白の日洋、その下の艶やかな人には往來の目が限りもなく注がれた。

魔所の一劃に限られた野暮は昔である、遊廓の流行が一般の標準となる今色の賣買は良家の表看板で盛んに取引される、待合ならぬ待合は東京市中に觸當るほど出來た、此處も新しく出來た、絶對に安穩秘密を保護すべく某警察署の目と鼻の間にある事が世間体に利く何よりの廣告となつて引きも切らぬ裏口からの男女を迎へ、表面は一切遊戯娯樂の文明的機關を備付けたと

稱する某倶樂部、其處の一室に對座つたのは大野廣之と喜代子である、長い半日をこの秘密の世界に酒に興を聳らせつ、溶けんばかりの快樂に耽つた両人は今湯上りの浴衣の儘、築山を眼下の景色好い二階で、漸次に逼る時刻と共に情思も躍るが如く膝を相觸れ手を握り合ふては蜜汁のやうな私語を交はした。

『貴郎屹度ね……屹度可いのね』

『何？、何が？』

『あらあんな呆けた顔をして憎らしいねえ、今の事よ、擧式の事よ』

『ウムその事ですか、今更その念を押されやうとは思ひ掛けぬから……大丈夫です、御安心なさい』

『ほゝほゝゝそんなに改まらないかて可いわ、煩く尋ねて怒つて？』

『はゝゝゝ怒つたり怒られたりするにはまだ暫時時間を要しますね、ナル可く早くそんな事に爲たいですな、一切の虚飾を除つて眞の情味に觸れるやうにならんければ夫婦とは云へないですから』

『だつてさうなつたら又綾子さんの樣になるのぢやなくつて』

『はゝ、、、彼女は以前の俺には相應した妻だつたのです、雖然既に俺は大きな自覺に到着したのです、それからの俺の事業を内助して行かうといふには貴女の樣な方を得なければ絶望ですから……彼女の事を云ふのは貴女自身を侮辱するのだ』

『妾だつて其精神だけれど……男の心はねゝ』

喰入るやうな秋波を向ける。

『男心と秋の空ですか、そんな事を云ふ樣ぢや貴女の新し味に錆がつく、俺が變心したら貴女も變心しますと云つて貰ひたいはッはゝ、、、、併し安心なさい、貴女も左樣だらうが俺も左樣だ、モウお互ひの齡になると戀にも確かに計算が伴う、俺も貴女も前途に大きな希望がある、俺が運善く鑛山を掘當てたら黄金の富と共に両人は戀が獲られる、今の痩浪人ぢやア貴女が物好きだつて相手にして呉れますまい、實際戀は立派に飾りたい、暗い納屋の隅で抱き合つたところが何になるものですか、そんな戀はモウ舊式で陳腐で價値がありません、尊敬と羨望の的となつて榮華と誇りの中心に立つて、そこで始めて戀を思ふ存分ひけらかす……といふので無くちや嘘ですよ、手鍋提げてもは決して戀の理想ぢやありません、戀よりも手鍋の方かズンと重いですからな、要するに俺は屹度成効して見せる、屹度成功すると信じて貴女も俺に戀を注いで呉れた、俺も其通りだ、之が両人の赤裸々でせう、能く夫の成功を祈ると云ひますね、俺も成功は祈つて欲しいが祈る立場が僞善ぢや面白くない、俺よりも先づ貴女自ら富を獲たい爲に祈つて下さい』

（一三）

『喜代子さん、俺の心持が解りましたか』

と廣之は女の顔を覗いた。

『能く解つてよ、妾も其通りですわ、些とも虚飾の無い所を云つたら可いわねゝ』

快い疲勞に身を支へるが煩く、やゝともすると男の膝へ乗つかるやうに好きな姿態をしながら。

『本統に貴郎が此儘の浪人と思たら妾身を許さなかつたかも知れないわ、そして屹度鑛山の事業に成功して両人で交際界に出て人を羨ませる時が來ると信じなけあ斯な約束なぞ爲やしないわ、これが眞の妾です、水臭いといふのね斯なのを世間で、だつて妾には貧乏してもとい

ふ樣な戀は想像することも出來ないから……』

廣之は愉快氣に笑つた。

『それ、それです、それが有難いのです、さういふ新しい形式で戀を捉まへたのはお互ひの幸福です、貧乏しても両人で暮したいなんテいふ虛僞な戀ぢや滿足が出來ないから……喜代子さん』

『え』

『俺と貴女とは從來の古い……黴の生ねた陳腐な習慣だとか道德だとかいふやうな物を破壞して行うぢやありぢやありませんか、口で矢鱈に新しがる徒輩も案外に弱い先生達で、色の着いた酒を飲んで威張る位ゐが關の山ぢや心細い、一番お互ひは不言實行主義でウンと新しいのを發揮して遣りませうか、此過渡時代に新しい人間の生活振といふ模範を示すのも可なり意味のある事業ですぞはッはゝゝゝ』

『眞に然ですわね、両人でねね』

と男の手を握つて締る、其儘に任して置いて廣之は夕の空に鮮やかな遠い雲の色を眺めて居る。

『貴郎何を考へてるの』

『…何も…喜代子さんあの美しい雲を御覽なさい、層生り合ふて日光を受けた美しい色はお互の前途を祝するやうですね……白いのやら紫のやらが底になると一つの黃金色になつて輝くあの雲を……黃金色が嬉しいぢやありませんか』

と廣之は醉の上つた面に夕陽を浴びて燃ね立つやうな色をしながら。

『俺の心機を轉じさせたのはあの色だ……貴女と俺を結びつけたのもあの色だ……今に俺はあの雲の團塊よりも大きい黃金を捉んで見せる、屹度捉んで見せる……』

喜代子は握つた手に情を籠めて心ゆくものに男の顏を見上げる。

『あれ程の金塊があつたら貴女と婚約の指環も大分大きいのが出來るはッはゝはゝ』

『ほゝほゝゝゝ』

両人は明るく照す夕陽に痴態を障子で閉め切つた、廣之は思出したやうに。

『薫は何して居ますな』

『薫さん？……妾充分保護の責任を盡してますから御安心なさいよ』

と喜代子は問はいでも可い事をといふ顏をして。

『貴郎そんなに薫さん氣になるの』

『イヤ俺には今彼な者を氣にする餘裕は無いですがね、定めて厄介だらうとお察しするのです』

『……厄介ッてこと無いわ……妾に能く懷いてモウ綾子さんの事なぞ忘れ了つてるから……小供は邪氣が無いわねえ』

『貴女に懷いて居ますか、ウムそれは結構だ』

『結構だつて……貴郎何も氣にしないものならそんな事尋ねないかて可いわ、妾に任して下すつたらそれ限で可いわ、妾貴郎が子供の事を聞くと不愉快よ』

眉を一寸動かして。

『薫さんの事を尋ねる時は貴郎屹度何か思ひ出してるわ、聯想するわねね、厭な事ッ』

とツンと拗て見せる。

『はゝゝゝそんな誤解は貴女らしくも無い、俺にそんな意思が微塵ほどもあれば彼子を貴女にお賴みはしないから』

『だつて……妾の感情が承知しないもの……薫さんは妾の子よ……妾の子として尋ねて下さるのなら可いけれど』

『はゝゝゝぢや俺の子で即ち貴女の子の薫？』

『はあ、それなら可いわ』

子供の樣な甘へた調子で。

『壯健で勉强して居ます』

『モウ貴女を母と呼びますかね』

『當然だわ、貴郎の樣に何時までも他人行儀ぢやないから』

と皮肉を浴せて眼でも優しう睨む。

（一四）

廣之の出發を見送つた喜代子は歸途に兄信明を本邸に訪ねた、信明は京阪の遊說を畢へて四五日前に歸つて來たので、喜代子が直也の神木朱衣に途中で遇つたのは兄の歸京を人々と共に新橋に迎へての歸路であつた。

喜代子は嫂や繼母との仲が面白くない爲に氣隨な彼は京都から歸つた後は向嶋の別莊で勝手な獨居をしたり今は巽邸内に住んで滅多に本邸へは寄付ぬのである、兄信明が妹を愛する外は宛然喜代子は男爵家には他人のやうである、繼母や嫂は彼を恐ろしい物に忌み嫌ひ彼は又信明以外の人々を眼中に置ぬ態度で居る、偶には立寄つても兄の居室の外には姿を見せぬ位ゐで。信明は遊説の報告書類を頻りに認めて居る、其處へ入つて來た喜代子は卓子の横へ起つて。

『兄樣、今可けないの、相談聞いて下さる譯には行かないの？』

『聞く、聞く、隙は無いがお前の話から聞かぬといつても聞かさずには置くまい』

と笑ながら鼻眼鏡を外して向き直つた。喜代子を椅子は寄せる。

『オ、俺から先づ聞きたい事がある、お前彼件は何したのだ』

喜代子は兄の詞を解しながら故意と呆けた顏。

『あれッて何？、兄樣』

『彼件さ、大野よ』

『ほゝほ』

と笑つたが一寸顏を染めた。

『無論成功さしたらうねお前の事だから……』

『……知らないわ』

『何んだ羞恥むお前でも無らう、未だかね、それともモウ問ふだけ野暮ッてところまで進行してるのかねはゝ』

『ほゝほ』

『ほゝほぢや解らぬ、大野君は今日出發した筈ぢや』

『はあ妾今迄つて來たのよ』

『や送つたのか、左樣か、ウム早い、早い、それでこそ俺の妹ぢやはッはゝゝは』

葉卷に火を點けつゝ。

『厄介な子供まで引取つて世話をしてるといふのだから無論冗才は有るまいとは思つたがね、大丈夫だらうな、どれ位ゐの程度まで進んでるか聞うぢや無いか』

『厭よ兄樣……そんな弄るやうな事ばかり』

『弄るもんか、俺はそれを聞く爲にお前の所へ出掛けやうと思つてたのだ、オイ喜代さん、大野は屹度掘り當るぜ』

と椅子を前に動かして。

『京阪で住友や藤田さんテいふ經驗のある連中に遇つて話を聞くと實際あの鑛山は有望ださうだよ、巽の御前の手に入る前に藤田なぞは隨分運動したといふ事だからね、大野は屹度成功するらしいせ』

『まあそんなの……好いわねね』

と喜代子は顏を輝かす。

『好いッてお前大野の成功に加はる資格を拵ねたかね』

『ほゝほ大丈夫よ兄樣』

『左樣か、それで安心した、大野夫人となれる段取にさへなつて居れば可い、逃しちや可んよ實に巨きな捉へ物さ』

『逃すつたつて人質があるわね、彼の子』

『ウム子供か、あれは流石にお前の仕事で機敏ぢやつた、彼子を預つて居るのは大に可い、男の心を制するには最も巧みな手段ぢや、併し厄介だらうな』

『厄介だわ兄樣』

と喜代子は訴へるやうに云つた。

『妾彼子には困つ了う……』

『はゝゝ酷い困り樣だね、何困るのだ』

『何と云つてお話にならないわ』

眉を寄せて口を歪めて左も手段に疲れたといふ風。

『お前に懷かぬのだらう、子供を育てるといふ賢母式ぢやないからな……』

『……育てるわ、自分の子だつたら育てるわ……あんな他人の子なんか』

『それが事業の手段ぢやないか』

『さう思つて忍耐して居るけど……彼な憎らしい子供も無いわ』

『暫時の忍耐さ、大野夫人となつて了へば彼を者なぞは何でも可い、それから他人のでなしに早く自分のを拵へるのさ、楔子を打込んで置くことぢや』

喜代子は俯向いて笑つたがスグ困つた顏になつて。

『兄樣、妾聞いて欲しいのは其子供の事よ、後生だから兄樣彼の子を何かして下さいよ、妾いくら手段だつてモウ耐え切れないもの』

（一五）

彼の子を何かして呉れといふ妹の樣子がいかにも弱つて見ゐるので信明は默つて其話に聞入つた。

『妾から進んで引取つたのだから他人には云へないけど……妾彼の子の爲に宛然身躰を縛られて了ふわ』

『可いぢやないか、子に縛らるゝ代りに親を縛れア、大野を逃さぬ爲の手段ぢやないか』

『子が先に逃げさうだわ』

『逃げる？逃げやうとするのか』

『小いさい癖に妾に全然反抗するのよ、油斷も隙も出來ないから妾隨いて居なければ……妾外間の交際も用向も其爲に悉皆お廢しになつてよ……情ないわ』

『何いふものかね、まだ十う位ゐなら何とか籠絡の爲やうがありそうなものだが……大野は何な考へで居るね』

『今は子の事なぞは考へて居られないから妾に任すッて』

『愛情はあるのだね』

『それはねえ、絶ねず樣子を聞くのだから』

『ウムそれぢや子供は離されんね、大切な人質だ』

と云つて首を傾ねつたが。

『幽閉んで置くさ、何してもお前に懷かんなら詮術が無いぢやないか』

『だつて生き物だもの、妾その番人をして居なけれゐならぬのは詰らないから……今度の不在にでも逃げられちや大變だと思ふと厭になるわ』

『困るなア其相談には、子供を押付られちやア兄樣だつて困る、之が公然出來る事なら何でもないが今のところや極めて秘密にせんとお互に妨害を受けるからねえ』

『何處か確りした所へ預たいと思ふわ』

『預けると云つて秘密の上に逃さん樣にといふのだからオイそれと心當りが無からうぢやないか……』

兄も妹も同じ當惑の体。

『待て々々、これ位の事に兄様の智囊が空になる筈ぢやない、お待ちなさい今考へるから』
信明は暫時腕を組んで思案する。
『向嶋の別荘は何だ、彼所の番人夫婦だつたら滅多に秘密も漏れまい逃がしもすまいぢやないか』
『兄様、妾話しする事忘れて居たわ』
と喜代子の彼の神木朱衣の一條を話した、文士招待會の夜の事から巽伯の令嬢雛子が見ぬ戀に憧がれたこと、雛子の戀を成就さすべく自分が神木を近づけんとしつゝあること、其手段として向嶋の別荘を暫時座敷を貸して遣る約束を爲た事なぞを詳しく語つた。
『驚いたなアあの馬鹿姫様が……戀？、フ、、所謂はじける時かなア』
『彼なのは猛烈だわ、妾に何しても彼の人をお婿さんに欲いッて强請むのよ』
『其神木ッて男は幸福者ぢやないか、巧く持掛ければッンと物になる』
と云つて信明は笑つた。
『これア俺より世間には骨を折らずに金儲けをする奴が多いぞ、大野でも其男でも兄様より果報が上だ、チョッあの馬鹿姫にそんな色戀があると知つたら兄様が物にするのだつた』

『あんな事をほゝほゝゝゝ』
『眞實さ、苟も金が儲かれば何でも遣るさ、大野が心機一轉して鑛山を掘りにかゝつた如く俺も伯爵令嬢の發掘に着手すれば可つたはッはゝゝゝゝ』
『兄様戯談なしに考へて下さいよ、別荘はそんな事になつてるから』
『何だ其神木といふ男は、賴まれる樣な奴ぢやないか』
『さあ、隨分變つた男だけど……妾これから說きつけて雛子樣の戀を叶ゐる積だけれどね』
『それが巧く行つたらお前も莫大儲かるね、モウ冗才なくあの馬鹿姫から運動費を取つてるのだらう、道理で此頃は兄樣に餘り無心が御無沙汰だと思つたよ』
『ほゝほそれは幾らかねね、兄樣だつて助かるわ』
『驚て鑛山王の令夫人にはなれる、伯爵家からは絞り取る、オイ喜代さんお前も兄樣を凌駕するぞ、貸して吳れるだらうね』
『何程でもほゝほ、だから今の間に面倒を見て下さいよ、今の事何すれば可いの』
『子供か、神木ッて奴にそんな甘い事を取持つのならそれを恩に被せて子供を番させやうぢやないか、別荘に置いて遣れば恰度好い都合だ』

（一六）

『それも可いかも知れないけどまだ氣心の判らない男だから』

と喜代子は兄が神木を薫の番人に頼んだらとの詞を危むだ。

『無論此方の者にしてから後の事さ、何な奴か知らないが筆で飯を喰ふ分際の男ぢやないか、金だよ、金で引縛る分にや譯は無い、馬鹿姫だつて今誰しも其勢力の下に平伏さうとする巽伯爵の令嬢と共に金が獲られるといふやうな事は貧乏文士が小説の趣向にも想像のつくものぢやない、お前の方の仕事が運んだら何時でも俺が出て行つて子供を引受けさせて見せる、左樣するが可い』

『左樣なればねえ、妾あの子の面倒さへ無つたら』

『一方の話を早く埒を明けて了うから』

『それが可い、御意の變らない中に男を押付けて了うが可い、功德にもなれば儲かりもするはゝゝゝ併し御前夫婦は驚くだらうな、まだ知るまい』

『歌子樣は知つてらつしやつてよ』

『知つてる？、知つて媒介をして呉れといふのか』

『男の身分なぞを一通り調べた上で格別の事が無つたら雛子樣の願ひを遂げさせてやりたいと仰有るの、大分の財產を分ける積らしいわ』

『親馬鹿だなア』

と信明は笑つた。

『御前が知つたら眞逆そんな事も許すまいよ』

『兄樣御前に知らせて妾の仕事を妨害しちや厭よ、そんな事したら肯きませんよ』

『そんな事はせん、だから邪魔の入らぬ中に早く男女を一緒にして了うが可いといふのぢや、關係が出來たら何する事も出來なからうぢやないか、恰度お前と大野の如きものさ』

『知らない』

喜代子は憤つた顏をして。

『それは又別ぢやありませんか』

『別だけれどもさ、道理は同じ事ぢやないか』

『モウ可いわ、そんな事聞かなくてよ、妾歸つて別莊へ行つて見やうね、今日あたりに來る約束だから』

『別莊の狂言は面白いな、彼所へ馬鹿姫も連れて行くのかい』

『それは妾にチャンと筋書があるのよ、連れてつたり招だりね』

『何しろ作者が斯道の苦勞人だからね』

『またそんな言を』

と睨む。

『だつて喜代さんは却々豪いよ、何とかいふ俳優も買つたッていふ新聞が見えたやうだぜ』

『嘘よ彼な事』

『何だかね、此頃のやうに融通がつけば買ひ兼もすまいぢやないか』

『ほゝほ、それはねね買つたり賣つたり時の場合ぢやするわ、妾も兄樣と同じ宗旨で金儲け一方だから……世間の批評位ゐ構はないことよ』

信明は我意を得たりとやうに大きく頷いて。

『流石に兄樣の妹で大野令夫人ッ』

『ほゝほゝ』

『其氣で三人が活動して行けば近き將來に於て屹度大發展が遂げられるぜ、愉快だ、精々自分々々の事業に努力しやうよ』

『妾ひとり女だもの兄樣加勢して下さいよ』

『それは爲るさ、別莊にも近い中に行つて見やう、何しろ此報告書だがね』

と卓子の上を指して。

『これを整理して御前へ出して置ぬと用が片附かぬ』

『京阪の結果は好かつて？』

『無論さ、兄樣自ら出馬してヘマを遣つて堪るものか、地方の模樣が喜代さんに見せたいよ、俺は御前以上に歡迎るからね、盛んなものさ』

『新聞では悲觀の記事ばかりだから妾憂慮たわ』

『新聞なぞが的になるものか、愚論を輿論と思つて謟らつてばかり居るのだからね、實際は今度の遊説で我黨は大に京阪に根據を占めたのさ、これを御覽俺の舌三寸で此だけの入黨者が出來たのだ、これを御前に見せたらあの目も鼻も消くして喜ぶぜ』

「まあこんなに？」

と喜代子は兄から書いた物を手に取つて。

『二百人以上ねえ、まああの短時日に斯なに？』

『はッはゝゝゝ』

信明は身體を動かせて笑つた。

『その半分は影法師さ、喜代さん、物事は斯いふ風に遣らんと可んせ』

（一七）

玉川停車所より畑を越ね河原を歩いて瀬田の渡しの向ひ側に鬱々とした青葉隱れに石の鳥居が見える、此界隈の鎭守八幡の社で、小さな宮の傍には低い平家建が空を覆ふた樹立の中に詩にある『杜の家』といふ姿で、拭いたやうな瓦屋根を見せる、此家が神に仕ふる身の玉木道彦の住宅である、道彦は綾子の父で、綾子の實家は此水と砂の麗しい玉川である。

水のやうな新綠に映らうて石の玉垣は鮮かに、苔に古い檜皮葺の社殿に神寂びた朝の御饌供ふる道彦の柏手はまだ夜の儘なる靜寂な杜の中に淸く響き渡る、續いて緩やかな祝詞の聲が起つ

た。

『御免下さい』

と型ばかりの玄關に立つて案內を乞ふ者がある、誰も返詞が無い……天下四方乃國仁波罪止云布罪波不在止科戶之風乃天之八重雲乎吹放事之如久、朝之御霧夕之御霧乎朝風夕風乃吹掃事之如久……と大祓への詞は人の心を鎭めて呀えた。

玄關に立つた人は其處に腰を下した、凡そ三十分ほど經つと道彦の白い直衣姿が暗い社殿の楷段に繪の樣に現はれた、我を待つ人ありと見て老人は急いで近づいた。

『オヽ、何誰ぢやな、失禮を致した』

『イヤお勤め中を邪魔しました、僕は斯いふ者ですが』

と名刺を出す。

『一寸失禮を』

道彦は座敷に上つて衣冠を脫ぐと眼鏡を掛けながら出て來た。

『甚だ失禮、眼鏡が無いと薩張な』

と云ひながら名刺を讀む。

『フム榊直也……榊……』

『僕ア榊直也といふ者です』

道彦の顏の色は急に變つた、眼鏡越しに睨む樣に見て暫時は物を云はなかつた。

『チトお話したい事があつて來たのですが……』

『榊と云へばお前は大野の家の敎師を勤めて居た人だらう、お前が何用あつて此家へ來られたのぢや、俺は大野の妻女綾子の父ですぞ』

と語氣が荒い。

『大野夫人の御尊父といふ事を知つて來たのです、夫人の身上に就て御相談したい事があつて進んで來たのです』

『進んで來た？俺はお前に遇うのは快しとせんのぢや……』

『僕に遇うのを快しとさせる爲に來たのです、貴方の惑ひを破る爲に、且は夫人母子を救ふ爲に僕は貴方に面會を求めに來たのですぞ』

『フム……』

と道彦は考へて。

『俺の胸中の晴れるまではお前を此家に上げる事は出來ん、其處で話を聞う、話があれば其處で話しなさい』

『此處で？はッはゝゝゝナル程貴方は面白い、それぢやア此處で話しませう』

と直也は玄關の板の間へ端然と座つた、道彦は娘が不義の相手と云はれた榊直也が不意に眼の前に現はれたので怪訝と憤怒に感情を躍らせて屹と凝視つた。

『御老人、貴方は御自分の娘……綾子さんの人格を信じる事はお出來でせうな』

と直也は口を切つた。

『親として子を信じない者は無い……それに子は親に反く……俺はお前よりも自分の娘が憎いのぢや』

『何故憎いですか、他人の僕でさへ同情するのに現在の貴方が何故現在の綾子さんを憎むのです』

『難義をして居るのは可愛相だが犯した罪が憎いのぢや、不義……神に仕へて穢れを忌む俺の耳には聞くことさへも憚る大罪が憎いのぢや』

と道彦は白い髮の毛を震はせた。

『不義といふのが誤解です、それが貴方が綾子樣の人格を蔑視した過失です』

『そんな事は無いといふのか……大野廣之は俺の眼識に叶ひ娘の希望によつて夫と定めた男ぢや、民友黨の孤壘に倚つて十年一日の如く淸節を守つた立派な男ぢや、それが理由なく子まである妻に不義の寃罪を被せる筈がない、綾子に後暗い事が無いとは何しても信じられぬのぢや』

『御老人』

と直也は板の間を膝行つた。

『昔の空氣が殘る美しい玉川の里からは都會の人間の生活……生活のみを求める險惡な人情は貴方には御了解が出來ますまい、貴方が神に仕へる正しい心に較べて今の世の人の心を測り知る事は困難ですぞ、貴方の信じた大野廣之は今は居ない、民友黨を捨て妻を去つた大野廣之は人間が變つて居るのですぞ』

直也は猶詞を續けた。

『貴方は變つた他人を信じて我子を信じない、貴方の正しい精神を其儘に承けられた綾子さんは實に婦人の龜鑑です、今の逆境に陷り重い病氣と鬪ひながら斷じて實家に歸らないといふ凜然たる貞操は寧ろ貴方がお喜びにならねばならぬと思ふ、それに綾子さんが惡いやうに誤解されるのは大野廣之は以前の男と思つて居られるからだ、險しい當世の人情が貴方にお解りにならぬのは道理ですが僕の申上げる事に依つて御考慮が願ひたい』

（一八）

『大野氏の方にも俺は不足がある、一度の手紙先で離緣の事を云つて寄した限此方から何度となく聞いて遣つても返事は無い、聞けば民友黨を脫いて金の爲に反對黨へ降つたとやら、彼男に限つて、そんな事は有るまいと半信半疑で居るのだが…その事と綾子の不義沙汰とは話が別ぢや、これが全く痕跡もない寃罪だつたら綾子自身に立派に辯解をして證明をたてるが可しい、病氣で弱つて居ると聞くと、俺も親ぢや、氣にかゝらぬ事は決して無い……世間に

對して強い事を云ひ張つた俺もモウ危いと聞いては我慢が出來ないで……連れて歸れとは云つたが良心は實に苦しい……よし寃罪にもせよ穢らはしい不義の名を蒙つた娘を其儘に此家へ入れる事は仕へる神樣に對して出來ぬ俺ぢやから……』

と老眼に涙を浮べた。

『歸るなと云ふ貴方も歸らぬといふ綾子さんも一つの正しい親子の精神の合致です、貴方も意思が綾子さんに依て行はれて居るのです、その麗はしい綾子さんの爲に僕は自分の職業を拋棄して起つたのです、僕は今日貴方に僕といふ男を承認して頂きたい爲に伺つたのですぞ』

『お前が綾子の爲に？、不義の相手と疑ひを受けたお前が綾子の爲に盡さうといふのか』

『左樣です、僕は僕自ら信ずる所があつて今後夫人母子の爲に身を捧げて盡す覺悟です、それには誰の干渉も許しません、假令貴方がその事を拒絶になつても僕は決して止めません、承認といふのは僕といふ男を貴方に認めて頂きたいのです、僕柳直也といふ者を貴方は何と見るか、それが聞きたいのだ』

直也が疊みかけて云ふ詞の意味を道彥は解しかねて、力を籠る面を眺むるのみであつた。

『御老人ッ、貴方は穢れを避けて神に仕へる方だ、神前にかゝつた鏡は人の心を照すと云ふ……

……鏡の如く正しい貴方は僕の精神を照す事が出來るでせう、僕がいかなる男であるかを看破することが出來るでせう、さあ此胸を見て下さい』

と胸を一つ叩いて直也は板の間に音立て膝を進めた。

『僕は不義不正は大嫌です、赫々たる正義の光明に輝く人道を大手を振つて濶歩したい、これが僕の主義だ、この主義を皷吹するが僕の天職と信じて居るまだ一日も此心を弛めた事は無いです嘗て大野家の家庭教師を囑托された時に不具の爲に學事に遠ざかる少年に對して僕の情は非常に動いたです、で此少年を教育して立派な人格に作り上げて見やうと決心して以來二年の間僕は魂を打込んで努力したのです、それに、それに殘念な事には家庭の風波の爲に折角美くしう育てた花を揉れて了う、そればかりぢやない、少年の教育以外には何の顧慮も無つた僕に對して突然夫人の不義呼はりをする、僕は其時寃罪を雪ぐ手段を執らうとしたのですが餘りに夫人が痛ましかつた、僕が憤つて爭へば爭ふ程波瀾を大きくして夫人が苦しめらるゝのを見るに忍びぬから、自分さへ耐へて身を退けば可いと思つて斷腸の思ひをして少年と別れたです、それから今日迄は夫人母子が酷い運命の手に虐げられて居る事を聞きながら、自分の事業の爲に又夫人の爲に一切遠ざかつて居たのです……が今度覺るところがあ

つて起つた僕は夫人母子ばかりぢやない、悪に墜ちつゝある大野廣之をも進んで救はねば置ぬ大きな決心を定めました、御老人、これが僕の精神の披瀝です、この他に一點の包藏も虚偽もない僕といふ事が……僕のこの精神が貴方の鏡には映らないですかッ』

其聲その態度は鐵壁をも貫くべき意氣を示す、腕組みをした道彦に逼るが如く說いて語つた。

《一九》

道彦老人は腕を組んだ儘熱心に直也の詞を聞いて居たが、赤誠の籠る聲は直に人の肺腑に浸む自づと動かされて何時か張つた肩を落すと。

『ウム貴方はそんな……まあ此方へお上んなさい』

『イヤ此處で結構です』

と直也は頭を振つて。

『貴方の疑念が晴れるまでは貴方の座敷へは上りたくない……僕の精神が御了解になりましたか』

『ナル程左樣聞けば……貴方は綾子や孫の爲に骨を折つて下さつたそれが反つて……、すると事實全く根も葉も無い寃罪を……あの大野が何して又急にそんな無法な人間になつたのか』

『御老人、貴方達の靜かな……境遇と共に斯した平和な生活に居られる方には彼の人達の心理狀態は想像されますまい、黄金萬能といふ主義の下に火焔のやうな息を吐て馳せ集る人達の心は目眩しい程變轉するです、そうして自ら安んずる所に就かんが爲には有ゆる犧牲を惜みません、妻を捨て子を顧みない位の事はまだしもです、慾望の爲には我身を破壞するまで盲目になります、本能の發揮だの個人主義だのと稱へて、獸類に近い行爲を敢てします、道德の標準は滅茶々々になつて了つて人々は犧牲の動くが儘に盲動する、一代を貫く信仰の靈能も教育の威嚴も無い、斯な危險な時代に大野廣之の如き人物を生ずるのは當然で敢て怪しむに足らぬのです』

『ウム實に嘆かはしい世の姿ですな』

と道彦は憂しげに云つた。

『この滔々たる大勢に反抗するにはそこに大きな覺悟が要るです、綾子さんが諫めた夫から離縁されて悲慘な今の境遇に居られるのも……薫君が慈愛の膝元を引離されて冷酷な擒れに泣

くのも……貴方達御老人夫婦が辛い思ひを爲れるのも、皆な弱い者が強い者の爲に虐げられる現象です、これに反抗するには有ゆる殘酷な迫害に打ち勝つ大勇猛心を固めてかゝらねばなりません、僕が筆を投じて起つた覺悟は其處にあるのです、僕は今惡魔との、戰鬪の門出に居るのです、此門出に臨んで貴方をお訪ねしたのは僕が正義の立場を貴方だけには認めて置いて頂きたい、それから……』

『榊さんッ』

と道彦は矢庭に詞を遮つて座を起つと板の間に下りて直也の下手へ坐り頭を下げた。

『あゝ俺は實に年甲斐も無い人を見るの明が無つた、改めて老人がお詫をする、貴方は實に尊い精神の方ぢや、そんな方とは知らなんだから實は今迄に貴方の事はあの車夫の音藏や妻女から聞かぬ事は無つた、若いに似合ぬ頼し方といふことは度々聞かされたが其度に、ナニそんな術で綾子までをと……イヤ實に輕卒な誤解をして居ました唯娘が不義の相手と信じて憎い奴とばかり思つて居たは此白髮頭に對しても實に慚愧に堪へません、榊さん、玉木道彦改めて足下に謝罪を致しますぞ』

『はゝゝゝお疑ひが解けたですか、謝罪などをされんでも可いです、それぢや僕と共に綾子さんに對する御疑念も晴れるでせうね』

『無論です……俺は娘に對しても面目がありませんぢや』

直也は喜びの色を現はして。

『アゝそれで僕は來た甲斐があるです、何うも綾子さんの御病氣が快くないから何か精神を慰めるやうな事をと思つて居るのですが、巽の邸に居られる薫君を遇はせたら一番の慰藉になるでせうがそれは却々容易な事ぢや無い、僕は今其方法に向つて心を碎いて居るのですが……昨日も見舞つた時のお話に子供を人に奪られた自分は親にも捨られた、お父樣の心は歸つて來いと仰有つても決して解けて居るのではあるまい……と斯な愁嘆を聞いたです、それで僕は僕自身の眞心を以つて貴方に衝突かる爲めに遣つて來たのです、お疑ひが晴れたといふ事を聞せたら定めて喜ばれるでせう、彼な病症ですから精神の慰安が一番功能があるです』

道彦は膝にポト〳〵と涙を落して。

『……有難う、貴方はそれ程に母子の事を思つて下さるか……イヤ實に御配慮をかけて相濟みません、そんな事が明らかになればスグに當方へ引取つて介抱を』

と云ふのを遮つて。

『イヤ綾子さんは大野の家へ歸られる樣にならなければ此家へは斷じて來られますまい』

（二〇）

『綾子が此處へは歸らぬと云はれるか』

と道彦は子を思ふ憂思に悄然として。

『それは此間からも妻女から手紙で云つて寄して居るのですが俺の心が晴れて見ると當人が何と云はうと親の俺として此儘にしては置けません、連れ歸つて早く快くしてやらんことには』

『イヤこの事は僕も綾子さんに贊成しますぞ』

直也は老人を諭す樣に云つた。

『親子の情愛として道理なお話ですが、綾子さんの强い決心も尊ふべき事です不法な離緣は承諾しない、即ち自分はまだ大野の家を去つたものでは無いといふ自信を損じない爲に斷じて實家の敷居を跨げぬ、何な辛酸を嘗めても今の儘で居るといふ凜然たる貞節の氣慨……それ

を曲げさせるのは反つて病氣に逆らうのです、それから僕にしては此男恥かしい壯烈な意氣が實に嬉しいのです……それは御婦人で殊にあの大患だから優い貴方達両親の手で介抱は受けたいでせう、空氣の良い保養に適した此處へは歸りたいのは山々でせうあの眞黑な裏家で苦しい生活と病氣に惱みたくはありますまい、併し其處が實に尊ふべき精神です、大野の家へ歸る時か、又は棺に入つてゞなくては、今の住家を出ないと云はれる精神が……』

『綾子はそんな事を……そんな決心をして居りますか』

と道彦は鼻を塞らせて悲しげに云つた。

『僕は綾子さんの此決心を提げて大野廣之們に當る覺悟です、ですから之は僕からもお願ひします、辛いでせうが何か綾子さんを今の儘に置いて上げて下さい、そして母堂を看護の爲に隨けてお置きになれば、間接には僕が彼の音藏と力を合せて屹度保護をします、病氣の爲にも事情の爲にもそれが可いだらうと思ふですから』

『ナル程お話は能く解りました、それではあの儘にして置きませう……宅へ入れぬといふのも迎へに行うといふのも子の爲に惱まさるゝ親の情です……柳さんお察し下さい』

老いの袂は屢濕れる。

『御安心なさい、御病氣は半ば精神上の打撃から來て居るのですから僕の事業が進んで行く程慰安を與へる事が出來ませう、一刻も早く病氣を平癒させる爲に僕は急いで着手します』

期するところあるもの、如く勇ましく語る直也の顏を繁々と凝視て。

『榊さん、貴方は實に……綾子母子の爲に神とも佛とも……緣も由りも無い他人で親同胞も及ばぬ盡力を下さるのは何といふ御深切ですか……俺は此通り年を取つてお社の番しか出來ぬ老軀です、綾子の妹が居るのですか之はお恥かしいことだが紡績へ通ふて勞働の賃金で俺等の手傳ひをして居ます、斯な時に誰一人俺らの爲に力になつて呉れる者は居ませんぢや、貴方といふ方が居られなかつたら此儘泣寢入になる上に綾子はそれが爲に悶死をするかも知れない……實に感謝の詞はありません』

『イヤ禮を云はれると反つて不愉快です僕は此世界の……人類の約束に基く人道といふ法則の上に斯な矛盾や破壞が公然に行はれるといふ事が不思議でならんです、それを研究が出來ると思ふと此機會を與へて下さつた事を僕からお禮を云はねばならぬはッはヽヽヽ』

と直也は哄笑をして。

『文學に志して紙の上に詩を書くことばかりを事業にして居た僕はこれから生きた詩中に身を

置く事が出來ると思つて非常に興味を感じるです、迫害も來い困難も來い、正義の力の强烈を見よ……といふ詩を歌ひながら僕大いに闘かつて見ませう』

『有難う、お詞に甘ゑて母子の身をお任せ致す……お見掛通り見ゑ透いた貧居で俺の感謝を表する何の方法も無いが……暫時待つて下さらんか』

と道彦は奥に入ると、軈て以前の直衣に冠を着けて嚴かな姿で出て來た。

『榊さん、嘲はれるかも知れんが俺は神に任ゑる身ぢや、貴方が惡人共と闘かはれる正義の軍の門出に神に祈願を捧げたい、此方へ來て下さい』

と直也を社殿に導くと、錆びた釣燈籠に御燈明を献じて拍手打鳴らし松吹く風に和して朗々と祝詞を捧げる、直也は云ひ知れぬ崇高な感に打れ目を瞑いて神前に額づいた。

『これを守護札に』

といふ頭上の聲にハッとして仰ぐと、直衣の袂冷々と顏に觸れ、道彦の清い姿は幣を片手に一本の白羽の矢を持つて起つて居る。

『八幡宮は武運の守護神ぢや、この矢は貴方を守らせらるゝ、お受なさい』

（二）

『奥様、榊様からお手紙が來ましたぜ』

と音藏が入つて來た、綾子は枕を離して出された封書を見た。

『音藏これはお前の名宛ぢやありませんか』

『へイ俺へ下さつたのですが……手紙は總て俺へ出すと仰有つて、奥様お讀みなすつて』

『妾が見ても可いかねえ』

と綾子は文中の用事は自分に關した事とは知れて居るから、直也の注意深いのに感じつゝ封を切る、痩せた手は手紙を繰るのも重たけである。

『＝前略昨日は失禮、其節君まで話した玉木家訪問を果し候……』

『まあ榊様は實家へ被入つて？』

『へイ昨日奥様のお話にお實家の事があつたから事業の手始めに旦那様に衝突つて見ると仰有たがそれぢやアスグ玉川へ入らつしやつたのですね』

『＝喜びたまへそして夫人を先づ喜ばせて呉れたまへ大成功なり、玉木道彦翁に面會し小生の主義なる至誠一貫を以て直接談判に及び候ところ流石に神に奉仕する神の如き翁は言下に忽ち小生の肺腑を見貫き一點の虚僞なき小生を悉く了解し呉れたるは近頃の快事久振りにて心から笑ひ申候…』

『旦那様のお心が解けたといふのでございますか』

『……左様だねね＝翁は大野廣之を信ずる事の過度なりし爲非理過失の夫人にある事と思ひ從て小生を不義の小人と誤解したるは實に慚愧に不堪とて小生の手を取て陳謝され、夫人に對しても面目なしとの詞を漏らされたる心の中は我子の貞節全きを喜ばるゝの情欣然として現はれ、親子の至情は小生又爲に泣かされ申候……』

『……』

讀む人も聞く人も涙が一時に涌く。

『＝これにて道彦翁は夫人に對し一點の疑念なし、又小生を信頼さるゝが爲に特に神前に祈禱を捧げられ小生が人道の背反者に向つて闘ふべき門出に武運守護たる八幡宮の征矢を賜はりたるは小生の感激實に極りなし、懇ろに夫人母子の保護を依頼され老眼に子を思ふ恩愛を

滿えつゝ見送られたる翁…嗚呼小生は一度び君が忠誠の精神に鞭れ再びこゝに人の子の親たる翁の武士的慈愛に激勵されたり、綾子夫人と薫少年を救ふ能はざれば小生の生に意味なし、この意氣を以て遣るから安心したまへ、作戰上暫時訪問を絶つ、猶小生は當分向嶋の佐藤男爵別莊に在り、彼の喜代子の周旋なり定めて君は驚くならん、驚いて又原稿破りに押掛けて呉れたまうなよ、大敵に當るべき用意と薫君に接近せんが爲の反間苦肉の戰略なり、小生の戰鬪に唯一の應援は夫人の健康回復なり、之を君に賴む、非常の場合は別紙暗號にて通信方夫人と御相談あれ、呉々も道彦翁の怒り解けたる事を傳へて夫人を慰めたまへ、開戰第一日直也荒瀨音藏君』

と一氣に讀んだ。

文字の上に溢るゝ直也の熱誠を兩人は手紙を取つては押戴き、押戴いては涙を零して喜んだ。

『原稿破りに來て呉れるなとあるねゝ』

『へェーそれは何も……』

と音藏は頭を押へて。

『まだお話を致しませんが……榊樣のお精神が如彼のとは知らねいで度々お賴みしても聞入れて下さらねいから、芝警察へ拘れた翌日不在の家へ踏込んで『愛』とかいふ小説の原稿を滅茶々々にして退けたのでございます……ツイ自棄酒に醉つたまぎれにヘイ……』

『まあお前そんな亂暴をして』

と綾子は始めて知つた事に驚いた。

『其日に榊樣を此方へお伴したのでございますよ』

『お腹立も無くねえ』

『原稿を滅茶々々にして嘘の小説なんか廢めて了へッて……ヘイこれも酒の勢ひで濟まない事を云つたのが反つて榊樣のお心に叶うてそれから急に此方の相談に乘つて下さつたので』

『お前がそんな事をするのも…榊樣にこれ程御厄介をかけるのも皆な妾といふ者の爲だと思ふと……妾實に濟まないねえ』

『奥樣それが可けませんせ、榊樣のお手紙の通り御病氣は俺の受持でさ、旦那のお心が解ける樣にこれからボッ〳〵御運が開けまさあ、確りして早く癒つて下せいましよ』

（二二）

佐藤男爵の向嶋の別莊は喜代子が巽邸内に住む樣になつてから以前の通り番人の老夫婦ばかりが居るのみで、隅田の流れに對つた眺望の好い二階は常時に鎖されてあつた、その二階が四五日前から珍らしく障子になつて風流な表門も明けられた。

『今日はお嬢樣が來るといふ日だよ、庭を掃除して置きなさいよ』

『俺が先刻掃除に行くと二階の書生さんがチャンと奇麗に掃いて居たわね、彼男は變り物だね』

『ほゝほ番人の株を取られない樣にお前さん確りなさいよ』

と別莊番の女房は笑つた。

『さあ何だらうねね彼男は、お嬢樣から大切にせいと仰有るのを見ると御親戚かとも思はれるけれども零落た御華族の二男坊といふ柄でもなしねえ、髯をモシャクシャ生やしてさ』

『でも人品は却々だぜあれであの髯を剃して奇麗に磨き上げて羽二重仕立にして自働車にでも

『乘つけて見なさい、時々お越しになる男爵樣よりか立派だぜ』

『それ程手數をかけたらねえほゝほゝほゝ』

『はゝゝゝ』

『寢轉んで本ばかり讀んでると思ふと庭の掃除に飛出したり……それで些とも外へは出ない方ね』

『變り物は間違ひない、今日お嬢樣が來たら判るだらうよ』

變物の噂をされるのは直也の神木朱衣である、彼は深い決心をして此別莊へ來た來て見るとモウ喜代子からの通知で番人夫婦は主人同樣の待遇をする、五六冊の書籍と着換二三枚が彼の荷物で、其荷物の風呂敷包と共に二階へ轉がつて居るのが彼の日課であつた、今日は五日目、番人夫婦の目に暢氣至極に見らるゝ直也の胸裡は計畫に一時の油斷も無つた、晴れた川の面に浮く都鳥の、足に隙の無い思ひて寢轉んで考へに耽る。

大野廣之の動靜を探つて見ると彼は鄕里山口へ歸省中との事である、之は歸るのを待たねばならぬ、一方薫に對する手段としては何處までも神木朱衣の假名に正躰を隱して深く深く喜代子の秘密の奥へ潛り入るのが上策である、薫を奪はずとも間接に保護する事が出來るまで進みた

い、それにしても自分は一つの身躰を同時に兩個に使はねばならぬ。大野廣之に遇へば忽ち自分の正體は暴露るのである廣之と夫婦同樣の關係があると思はる、喜代子には神木朱衣で通さねばならぬ、廣之と喜代子と並べては何しても出せぬ身體である……實に苦いが又奇抜だ。

と直也は小説の骨書を作る氣で時々獨り笑つた、が筆の死活は自在であるが此方は一寸も心が弛められぬ、幸ひに廣之が不在なのは天祐である、此間に喜代子の方を、と彼は大膽に決心して別莊へ乘込んだのであつた。

喜代子は午後に至つて現はれた、例の女優とも紛ふ華麗な盛裝を凝して、いつも己れの美に醉ふて居るやうな顏で晴々と車で運んだ、番人から何か聞取つた後二階へ上る。

直也はそれに氣付なかつた、椽側に向いて何かして居る、我に氣付ぬと知つた喜代子は滿面に笑みを湛ねてソット後ろへ歩んで、覗くと。

朱衣は太い洋杖に白羽の矢を添えて紙撚で其上を卷き立て居た、喜代子はフッと吹出した、それに驚いて後ろを振向くと。

『オ、喜代子さんですか』

と云つて直也は洋杖を椽に置いて起ちあがる。

『ほ、ほ吃驚させやうと思つたの、けど餘り可笑しかつたわ、神木さんそれ何？、矢を何するの』

と云つて喜代子はまだ笑つて居る。

『これですが……これはお守だと云つて人に貰つたものですから置場所が無いので洋杖に縛り付けて置くのです』

『矢だつたら八幡さんのお守りねほ、ほほ、』

といよ／＼可笑しがつて。

『まあ妙だわねね、貴方達でもそんな迷信を爲さるの、そんな物大事にして』

『ナニ信じるといふ事は無いですが折角貰つたものですから捨る譯にも行かんのでね』

『拋つてお了ひなさいよそんな物迷信臭いわ……洋杖に縛つたりしないでさ、人が笑ふわ』

『はッは、、笑ふですかな』

と直也は話を轉した。

『お詞に甘ねて遣つて來たですがね、僕御厄介になつて可いですかね』

『ほ、ほ彼な事を……お氣に叶つたら自分の家と思つて下さいよ』

（二三）

櫻の若葉を渡る青嵐は清々と座敷と吹く對ひ合つた直也と喜代子は欄干に逼る手の染るやうな梢の色を顔に映して愉快氣に語つた。

『此處でしたら小説描けませう、閑靜な事はねえ』

『結構です、貴方は何故斯な所を捨て伯爵邸に居られるのですか』

『妾、ほゝほ何故ッてことありませんけどね、妾獨りぢや餘り寂し過ぎて世間から忘れられる樣な氣がしますわ、それにあの巽さんの孃樣ね先夜御紹介しました、あの方が大變妾と意氣が合つて妾始終捉まへられて居るのですよ、そんなことで、如彼して居るのですが……貴方の樣な方が來て下さることが知れてたら好きな文學のお話なぞも伺へて……妾此處に居るのでしたわ』

と云つて急に袂を口に當る眞似をした。

『ほゝほゝ、妾が居たら貴方が入らつしやらないわねね』

『僕ですか、僕は來ますよ』

『ほゝほ小説家はお世辭が巧いつて事實ねえお世辭を云つてらつしやるわ、そんな事したら怒る方があるわ』

直也は斯な詞が男爵令孃の口から平氣で出るのに呆れた。

『ねね神木さん、左樣でせう』

『僕には誰も干渉する者はないのですが』

と堪へて云つたが此處ぞと此方からも探つた。

『はゝゝゝ僕が來たら貴女が逃げるでせう』

『逃げますかよ、誰に遠慮して逃げるものですか』

『貴女は御獨身ぢやないでせう』

直也は此詞が何と凝へるかと凝と喜代子の顔を見た。

『まあ可愛相な事を……妾亭主持の女に見えて？』

『見るはしないですが何とかいふ政治家と御婚約があるとか何とかいふ樣な事が』

『あら誰がそんな事を……』

と喜代子は一寸顏色を變へたがスグ何ともない調子になつて。

『誰がそんな事を云ふのでせうね……それに妾政治だの實業だのッてこと趣味に合ひませんわ』

直也は『此奴』がと腹の中で笑つた。

『妾何うしても文學ですわ、自分にはモウ研究が出來ませんからせめてそんな趣味の方と……ほゝほゝ妾氣の許される方だと直に開放しにするから……厭な女と思つてらつしやるでせうね』

媚びた目は濡色に輝く、微かに直也を見た、これで廣之を捕えたのだな、妖婦？と思ふ心を見せず。

『趣味の一致する男女が同棲するといふ事は理想でせうな』

『理想の夫婦ですわ、そんなので始めて結婚の意味があるのですわ』

『併し實際はさうは行きますまい』

『それで厭になるのよ、此人と思つてもねえ、それに種々の妨害が起つて……又或場合には自分の戀を犧牲にしなければならない事もありますわねね、現在妾……』

と云ひ掛けて喜代子は俯向いた、直也は何を云出すのかと面白く待つた、我を別莊へ招いた女の眞意、それを知る事の出來そうな詞の端々である。

『神木さん、貴方御結婚はなさらないの』

『結婚ですかはゝゝ、結婚より生活が僕には急用ですよ』

『あんな事を、結婚だつて種々ですわ、生活なんか其結婚から生じるのがありますよ』

『結婚から生じる生活……結婚が生活を生むのですな』

『生活にも種々ですわねね、その中で何事にも不自由のない上流の生活は誰でも欲しませう、其上流の生活を生む結婚であつたら貴方考へて御覽になる氣は無いの、生活の急用が無くなればスグ結婚問題でせう』

直也は謎の如き詞の意味を知ると共に、招待會の當夜我に紹介された伯爵令嬢雛子の事を思出した、其時にも能くは耳に留めなかつたが何でも雛子が文學趣味の夫を望んで居るといふ樣な事を喜代子が語つたやうに朧氣に記憶して居る、偖は……。

『上流の生活を生む結婚とは甚だ甘い話ですな、そんな物が何處かにあるのですか』

と飽くまで己れを捨てかゝる。

『何處かッてそんな物は滅多に無いのですけれど僅た一つ……それも貴方の前に轉がつて居るのよ』

（二四）

巽伯爵の姫雛子は先天的の低能とは後に聞いたのであるが、當夜の樣子を考へると全く左樣らしいのであつた、喜代子の後ろに隱れて默つて居るかと思ふと時々調子の外れた笑聲を出して、そして自分の顏ばかり繁々と眺めて居た、偖はあの智惠足らぬ妙齡の雛子を煽動して男の慾に誘ひ、其中間にあつて不正を働く喜代子の魂膽ではあるまいか。

直也は氣味惡い茨茅の闇の野中を辿つて猶恐ろしい底知れぬ古井を發見した心持で、堪へられぬ苦痛を堪へて居る。

『神木さん、そんな結婚が貴方にのみ授かうたら何うなさるの』

と喜代子は熱心を面に現はして返詞いかにと覗き込む。

『はゝゝゝ、所謂福德の三年目ですか、貧乏文士一躍して大紳士となるのですな』

『紳士どころぢや無いわ、場合に依つては華族にでもなれるのですよ』

『華族に？、貴女方のお仲間入ですな』

『男爵より上』

『子爵ですか』

『ほゝほモ一つ上』

『伯爵になれるのですか』

『それは貴方のお心次第よ』

『はゝゝゝ起て居て夢を見る樣ですな』

『妾だつて夢の樣な貴方の果報に肖りたいわ』

『喜代子さん一躰そんな甘い結婚の相手は何者で何處にある話ですか』

直也はそれと思ふ正躰を果して左樣か早く知りたい爲に急き問ふた、喜代子は案外に乘じ易い男をモウ掌中の者と見て取つて密かに凱歌の喜び。

『ほゝほそんなに急かんかて可いわ、そんな結婚が出來たら妾詰らない犧牲になるのよ』

嗚呼虛僞の結塊？、人の口は斯も悉く自由自在に虛僞の辯を弄び得るものであるか、斯の如く

出鱈目の放言を我口我耳にも憚からず眞しやかに列ね得る人の心理狀態……噫我が小說の筆の稚なさよと直也は想像の及ばぬ人間の淺ましい振舞に舌を捲いた。

『その婦人貴方知つてらつしやるわ』

『僕の知つた婦人？』

いよ〳〵だッ？、直也は首を傾けた。

『ほゝほ云ひませうか』

『云ふて下さい』

『云ひますがね、神木さん、これ重大な事件ですから貴方秘密を守つて下さいよ、さうしないと、これが世間にパッとすると妾の立場として大變困るから話が纏つた後なら可いけれど……その方はね、先夜御紹介しました伯爵家の令嬢』

『雛子さんといふ方ですか』

『彼の方よ、あの雛子さんがねほゝほゝほゝ』

喜代子は云難さうにして。

『あの方がねね……貴方に大變ですよ、戀を捧げて被居るのよ貴方に』

直也は躍り蒐つて其口を引裂きたい、と思つた、そして口の中で……痛ましい薫……哀れな綾子夫人……を繰返して、眼前の敵に色をも覺られまじと努めた。

『ほッほゝゝそんな馬鹿な事があるものですか』

『あら妾斯なに眞劍になつてるのに貴方信じないの、信じては下さらないの』

『信じると云つたつてそんな事がほゝほゝ』

『信じられないと仰有るの、何故でせうね、神木さん、妾が云ふから信用なさらんの』

『誰が云つたつてほゝゝゝ』

直也は笑つて居る間がせめて苦痛が少いと思つて無暗に笑つた。

『訝しいわねね』

と喜代子は少し憤とした樣子。

『雛子さんが貴方に戀して居るといふ事が何故そんなに可笑しいのでせう、神木さん妾眞面目よ、貴方も戯談でなしに聞いて下さいな』

『聞いて居るのですが、雛子さんは當世に權威並びなき巽伯爵の令嬢でせう僕は市井の窮措大……原稿料で飯を喰ふ痩文士ですぞほゝゝ』

『いよ〳〵訝しいわよ、貴方は優しい戀を小説にお描きですわね、戀は平等ぢやなくつて、え、戀は華族の令嬢と文士との間に垣をつくつて？戀ッてものそんな不自由なもの？神木さん、妾貴方に就て文學研究の手始めにこれから敎はりたいわ』

（二五）

非を遂げ非を飾るには都合の好い雄辯である、と思つて直也は默つて喜代子の云ふ事を聞いて居た。

『さ、敎へて下さいよ神木さん、戀ッてそんな不自由なもの？伯爵の嬢樣だから貴方に戀をする事は出來ないッて理屈があれば敎へて下さいよ、妾それを雛子樣に取次いで斷念させるから、あの方だつて可愛相ですわ……』

直也は此時我事業を前程の遙かに遠く極めて困難であるのを思ふと共にそれに盡す手段の普通では可ぬ事を一層に考へた何處までも我を沒して喜代子の歡心を買ひ敵の裏搔く爲にはいなる屈辱をも堪へ不快を忍ぶ覺悟で來たのであるが、いよいよ醜惡を增す喜代子の黑い腹中は想像

の外である、低能の令嬢を道具に遣つて己が利慾を貪る奸計とは見透された、いかに我を沒してかかる事業とは云ひながら、この惡事を助ける如き行爲が何して出來やう……ハモウこれまで？。

朱衣の假面投げ棄て榊直也の本體現はし惡を懲す男の鐵拳に其美しい顏の歪むほど打挫ぎたい？……逸る心に腕が動く……がそれを決行ば計畫は破れる、漸くにして近づきかけた薫と我との間は元の通りになる、夢のみに手を取つて泣かねばならぬ我は忍ばう……、相見んとする一縷の望に旦夕の命を繫ぐ綾子夫人は…。

『ほゝほ何を考へて被居るの、妾の云ふこと、間違つて？』

『はッはゝゝゝそれは左樣ですな、まあそれならそれにして置きませうか』

『氣の無い返詞ねね……』

と喜代子は焦れたさうに顏を眺めて。

『神木さん此事貴方能く考へて下さいなそれで無いと妾困るわ。中間に立つて眞個に困つ了ふわ、雛子さんは命懸けよ』

『考へると云つて何考へるのですか、あの令嬢と僕に結婚せいといふのですか』

『ほゝそれは其話になるのですけど……それはまあ後の事だわ、貴方の意向を概略妾聞いて置きたいのよ、そしてお互に知り合う爲に交際をなさるとか、そこは妾が中間に居る以上は甘くねね』

喜代子は直也を呑んでかゝつて居る、伯爵令嬢……それに伴ふ夥しき財産……、家なき貧文士の目前に盛り上げられた黄金の光り、其光りには聊か毛色の變つたらしい彼ながら心を盪さずには居まいと固く信じ切つて居る。

『可しい、そんな味い運は一生原稿紙に埋つて居ても捉まる物ぢや無いです、僕大に考へまして、暫く時日を貸して下さいと』

さら〳〵と云つてのけた直也は眼を閉つて居た。

『あゝ妾それで安心したわ、能く考へて下さいよ、貴方が承諾して下されば雛子さんが何なに……夫人や御前も何なにお喜びだか知れないわ』

『そんな事を伯爵夫婦が知つて居られるのですか』

『無論ですわ、それから決めて始めて貴方に話すのが順序ぢやありませんか』

直也は喜代子が伯爵家の家庭の奥深く侵入んで居る事を知つた。

『妾犧牲になつて貴方を雛子さんに讓る代りにねえ』

と喜代子は今迄よりも一層打解けた態度を見せて。

『貴方妾の力になつて下さるでせうね……お話しなけあ判らないけれど妾の境遇はそれは詰らないのよ、本邸の人達とは全然合はないから彼して別居してるでせう、兄は御承知の通り始終政治界の方ばかり奔走して居ますから妾の事など些とも構やしないのですよ、眞の孤獨……思ふと隨分心細いのよ』

それを待つて居たと、直也の心は勇んだ。

『左樣ですか、貴女方は氣樂一方と思はれるですが……左樣ですか』

と熱心な聲で云つて、同情すべく待構へた。

『それはねえ生活上の煩ひは些とも有りませんけど……隨分これで交際の方面を廣くして居ますからね、時々獨りの思案に能ない事なぞがあるのですわ。そんな時誰か趣味の合つた……氣の許される人があつたら力が借りたい……と思ふことが能くあるのですよ……神木さん、貴方これから萬望力になつて下さいよ、ねね』

と誰よりも親しいもの、如く甘ねた調子で。

『ねえ貴方……お厭？』

『僕の様な者が役に立てば何でも云つて下さい、斯してお世話になつて居るのですから』

『左様仰有ると何だか恩に被せるやうで可けないわ、妾そんな心ぢやないの、雛子さんの事でも調へば妾一番近い親戚でも出來た氣で貴方が厭と云つても縋らせて頂くから左様思つてくださいよ』

斯な話に時刻が移つて夕方になつた、喜代子は『一緒に御飯を喫べませう』と云つて階下へ下りた、直也は不快を堪へ堪へた爲に頭腦は割れるやうに痛む、蘇生つた氣で椽に出て欄干に倚れると。

『戰鬪だッ』

と微かに獨語つた。

（二六）

喜代子は此頃隔日位に別莊へ來て神木を訪ふのである、それは神木が漸次に自分の誘ふが儘に

隨いて來て、始めの難かしげにあつた圭角が取れ、雛子の事も此分ならと見込みがついたのとそれに連れて自分の希望も運びそうなのに勇んで、事の成就を急ぐ心に屢々車を寄せるのであつた。

今日兄信明が伯爵の所へ來たのを捉まへた喜代子は容易に放さない。

『兄様妾拜むわ、拜むから何かして下さいよ』

『はゝゝゝ又子供の事か、自分で背負込んだ癖に』

と信明は可笑しがつた。

『兄様がそなん事に手を出すのは所謂雞を裂くに牛刀の感があるな、それに實に公務多忙だよ、此頃は遊蕩の味を忘れた』

と云つて察して呉といふ様な顔をする。

『嘘を仰有いよ清香に聞いてるわ、煩いほど入らつしやるッて、煩がられる方へは身を入れて妾の事なぞ些とも構つて呉れないから……酷いわ』

『清香は相變らず當邸へ來るかね』

『奥のお稽古が濟むと妾の所へ屹度來て遊んで行くのよ』

『種んな事を聞いちや可んせは、、、』
『聞くわ、隨分兄様惚いのねえ』
『馬鹿なッ』
樣つたい笑ひをする。
『妾の云ふ事も聞いて下されなきや秘密を皆な摘發くから』
『可ん、可ん、其外侮りを禦ぐちや、兄妹らしく爲にや可ん』
『ほ、ほ兄様から兄妹らしくして下さいよ少しは』
『何して呉れといふのちや、相變らずお前の云ふ樣にならんのかね子供が』
『云ふ事を聞く聞んちやないわ、逃さない樣に捉まへて居なけあならないんだもの』
とホッと息を吐いた。
『晝間だけは女中に確り番をさせて置くのですけど、それでも些とも外の用事が落着いて出來あしないわ、夜は安々寢られもしないんだもの、妾斯な事がモ少し續いたら屹度病氣になるから……病氣になつて死んで了うから』
『ほッは、、、厄介至極の荷物を擔ぎ込んだものちや、そして兄様が爲た事の樣に云ふね』

『だつて……妾困るから』
『些と困らん事の相談にも接したいね、大野と愉快筋の如き！』
『知りませんよ』
『別莊は何した、神木といふ奴は、まだ物にならんのか』
『その事で相談したいのよ、モウ七分通り此方の物にしたのだから』
『それなら其男に預けたら何だ、馬鹿姫は何した、押付けて了つたかね』
『ほ、ほそんなに早く運びはしないわ、一寸變つてる男だから』
『未だかい、それはお前にも似合ないちやないか、先づあの甘い餌で引寄せさへすれば此方の思ふ通になるのちやないか、變つてるたつて何だ、一介の貧乏文士を伯爵の令嬢と黄金で釣るのに手間隙が要るものか』
『だからモウ兄様が出て應援して下さいよ』
『それは出ても可いがね、些と顔を見せたのかね』
『雛子さん？』
『金の顔さ』

『金はまだゞけれど』

『早く金でウロ〳〵させて遣るが可い、お前馬鹿姫から大分受領て居るだらうそれを些と吐き出すが可い、資本ぢやないか』

『それは出すけれど』

『二三百お出しなさい、兄様がそれと共に出掛けてやらう、一氣さ』

『そんなに澤山？、それを與るの』

『臨機應變さ』

『あんな事云つて兄様のお小遣にして了うのぢやないの』

信明はフッと吹出した。

『豪い様だが女だねゝ、喜代さんも馬鹿姫が其男と離れないといふ様な事になつたらお前の收入は大したものだぜ、實收何十分の一に當る端金でもつて自分の厄介な荷物まで下さうといふのは虫が好すぎる位ゐのものだ、出した出した、兄様はそんな些少な金に目はかけん、其代り成功謝金をウンとお出しなさい』

『あんな事を云つては厭よ』

『嘘さ、黄金主義に宗旨變へした大野廣之氏の令夫人だけあつて恐ろしく金に狡くなつたねはッ、、、』

(二七)

直也の所へ喜代子から電話があつた、豫てお話をした兄が御面會したいといふから今夜一緒にお訪ねする、といふのであつた。

喜代子は兄信明を紹介しやうと此間から頻りに云ふ、直也は一面識もない信明に遇ふことは格別邪魔にはならぬと思つた大野廣之が歸らぬ間の仕事である、自分を知つた廣之が歸つたら此處に神木朱衣で止まる事は出來ぬ、それにしても喜代子が飽くまでも廣之との關係を我に隱すのは幸ひである、秘密の廣之を我に遇はせる筈も無いから此方は極めて都合よく行つて居る、噂に聞いた巽伯の股肱として敏腕の名に高い信明に遇つたら又局面が何展けるかも知れぬ、喜代子がモ一つ我を捉へやうとして心を盡して居ることは能く解つて居る、それは何の爲であるかそれらの事を探るにも信明に接近するのは好都合である、と考へた。

夕方靜かな堤に自働車の警笛が聞ねた、直也は二階から見ると、それは喜代子兄妹であつた、萬一や一度でも遇つた事のある顏ではあるまいかと直也は細心に門前に下り立つ信明の顏を眺めた、カイゼル髯に鼻目鏡の颯爽たるハイカラ姿は喜代子の兄に似つかしいと思つた。

『神木さん、兄樣を連れて來たのよ』

と十八九の嬌聲である、聲を聞いて姿に接しても左程見當の違はぬ程喜代子は何時も若い若い扮裝をして居る、白い顏がトントンと階段を上ると、途端に電燈が點つた、明るい光の中へ立つた兄妹の姿で始めて別莊の座敷が主人を得たやうである。

『ヤア君神木君ですか、僕これの兄佐藤信明です、一度伺はうと思つたが公私多忙でね、失禮しました』

『イヤ僕が伺はんけれアならぬのですが』

『君ソウ嚴格にしたまふと僕反つて困る妹と同じ樣に交際つて呉れたまへ』

『非常な厄介になつてるです』

『厄介な事があるものか、君遠慮しちや可んよ、斯いふ腕白な令孃だからね、自分が文學が好きだからッて君を突然引張つて來るといふ女だからね、君迷惑でせう』

セルの上へ無雜作に縮緬帶を卷いて紋付の羽織を引かけた、至つて氣輕く口も極めて輕い男爵である直也は多く云はず兄妹の爲る樣を見ながら、機會に返詞を打つて居る。

『「涙」は實に御傑作ですね、餘り小說なぞには緣の無い方ちやが今度は此妹に勸められて旅行中に讀んだのですが警服したですよ』

『はゝゝ彼な物……お耻かしいです』

『イヤ謙遜したまうな、如彼いふ風の物を絕ねず供給して貰つたら日本文壇も賑はうでせう……此間の招待會も實は我輩の主唱ですがね、折惡しく地方へ出掛けて不在だつたから諸君の高說を拜聽する事が出來ないで眞に遺憾だつたが……幸ひに君が別莊へ來て下さつたのは有難い、これからはお邪魔をして大に啓發させて頂かう』

『それ御覽なさいよ、兄樣だつて嬉しい癖に……』

『はゝゝ兄樣は始めから喜んでるちやないか、君此處で一つ又「涙」に劣らぬ大傑作を出した呉れたまへと、左樣すると實に我輩の家の名譽だから』

口を極めて其人を賞めた、賞められた直也は死灰のやうな心持で居た。

『今夜は一ッ君と始めて遇ふ事を得た喜びを表して面白い遊びを遣らうといふ趣向ですがね、

ねえ』

と信明は妹を顧た。

『ほゝほ、だつて神木さんは御酒を召上らないから』

『君酒を飲らんのですか……君方で飲を解しないとは妙だね、皆な盛んに遣るぢやありませんか』

『だから御迷惑だわ、彼な所へお連れ申しては』

『ナニ構うもんか少々は飲るさ、如彼いふ所も見ないと小説の材料に困る、又一種の空氣があるからね、お前だつて行うといふぢやないか、行さ、行くさ』

と信明は獨りで決めて了つた、三人で歌と酒との巷へ自働車を入れやうといふのである、迷惑そうに直也が一寸座を起つた喜代子は兄に私語いた。

『兄様あんな事云つて『涙』を讀んだことあつて』

信明は崩れる様に笑つた』

『はッはゝゝ俺がそんな下らない物を讀む閑があつて堪るものかね、出鱈目さ、巧いものだらう?』

(二八)

新橋の待合如月の表へ自働車が止つた、幌を疊んで下りたのは信明兄妹と直也の三人であつた

直也は強ひて拒まず両人の云ふが儘に隨いて來たのである。

浮々した聲と華やかな燈火に送り迎へられて奥へ入る、御前様とお姫様、といふので女中の動く景氣が際立つて賑やかである、別の座敷で水調子の絃聲が聞える、直也は涼しい敷物に座つて先づ此音を聞いた時、藝妓……清香……といふ事を想ひ浮べた。

男の心を搖るやうな種々があつた、美しい膳は喜代子の注文で界隈の甘い物を載せて運ばれた

『物を喰ひに來た様だね』と笑ひながら信明は女將に聘ぶべき藝妓の名を通した直也は清香といふ聲がしなかつたので胸を撫すつた。

すると暫時すると襖を明けて何か早口に云つてお叩頭をした女がある。

『あらお珍しいこと、御前お嬢様と……』

直也はハット思つた、それは清香であつた。

『オヤ神木先生……でせう忘れやしますまい、先夜はまことに失禮お嬢樣の所で』

『ウムお前神木君を知つてるのかねえ』

『お嬢樣、知つてる段ぢやありませんわね、お嬢樣に紹介して頂いて』

『招待會の晩に妾所でねね』

『それは妙だ、神木君、此女は我輩の親戚さはつはゝゝゝ』

『ほゝほ』

と笑つたが清香は直也に顏を反けた、喜代子は。

『親戚だつてほゝほ、あんな戯談ばかり』

『お嬢樣可ござんすよ、遠い親戚に當りますッて』

『おばさん位ゐの所さはッはゝゝ』

『ほゝほ綱の伯母さん？、恐いから御用心なさいまし』

直也は氣振りにも自分と顏馴染以上の交渉あることを兄妹に知らさぬ清香の心に感謝した、そして藝妓といふ女の特別の情緒……何の屈托も秘密も無ささうに晴れやかに笑ふ底に、何事も胸にとの意を美くしい眸に通はせ、我不安の念ひを忽ちに破つて呉つた女の手際……誠意を嬉

しく思つた。

續いて多くの藝妓が現はれた、喜代子は種々の歌と話を聞いて喜んで居る、唯一人風俗の違ふ令嬢妾を上座に構へて、傳き敬う女達の淺い教育を憐むやうな尊大な態度を直也は又憐みながら眺て居る。

信明は頻りに盃を傾けた、醉につれて直也にも共に醉はんことを勸めて止まぬ。

『君そんな事ぢや可ん、今夜だけは一つ飲つて呉れたまへ、我輩の爲に飲つて呉れたまへ少し醉ふて斯いふ連中を客觀して見たまへ、そら屹度描けるよ、小説の材料になるよはゝゝゝ』

と大きな盃をさして。

『オイ清香、お前も自分ばかり醉はないで神木君に酒を勸めんか、お諂諛をして置かないと今に小説の中の惡黨に使はれるぜ』

『ほゝほ妾より御前の方が敵役ですよ、先生御前の事を小説にかいて下さいよ』

酌をしにかかると直也は拒んだ、銚子を下に置くと信明が承知しない。

『オイ〳〵清香そんな情意投合をやつちや可ん、はッはゝゝ手本にされるのを恐れたね、それ見ろ、餘り濫賣したり欺したりすると斯な時に恐ろしくなる奴さ』

『オヤ仰有い御前』

と大きな聲をする、喜代子が振顧いて。

『清香、負けちや可けないよ』

『負けるもんですか、さ御前、妾いつ專賣たら濫賣たら爲ました、神木の先生貴方裁判して下さいよ』

『はッはゝゝゝ神木君の裁判官は我輩忌避の申立をするそ、何も怪しいテ』

直也は聞ゐぬ風をして居た、清香は平氣で。

『ほゝほ狡るいわねえ御前、あんな事云つて負けまいとおもつてさ』

『イヤ酒を勸めないで速かに妥協するところが怪しいよ』

『口惜しいねゐ先生、貴方が召上らないからよ、お飲んなさいよ、酒位ゐ何ですよ』

と置れて盃に注いだ。

『ほゝほ御前があんな事を仰有るから先生眞面目な顏して被居るわ、可けないわね、一つ召上れよ、お氣が轉つて可いわ、お酒ッてもの何な……何な苦勞でも忘れられてよ』

『巧い〻〻、左樣勸めて呉れなければ可ん、さあ君、清香が大に盡してるぜ、一盞飲りたまへな』

直也は盃を取上げた。

(二九)

直也は飲けぬ口に二三杯を强いて受けた許されぬ心は堅く錠を下して居る、が其心の扉を來て叩くのは清香である、彼は信明に身を任せた女である、そして自分の爲に綾子母子に盡す事を誓つた女である、始めての夜と二度目の訪問と、彼が嘘僞ならぬ精神は自分に直覺された、その清香が心得た物にして勸る酒をツイ拒み得ず過したのであつた、信明は盃の相手が出來たのを自分が勝つた樣に喜んだ直也の赤い顏を見て。

『はッはゝゝ君醉中の趣きも却々捨た物ぢやなからう、君の參考になるさ』

『隨分苦しい參考ですな』

云つた直也の詞に一座はドッと笑つた。

『先生、小說ッてもの自分の知らない事でもかけて』

と小説好らしい痩面が云つた直也が何も應へぬ前に。

『それが想像といふものよ、想像の豪い人が豪い小説家よ』

と喜代子が敎へるやうに云つた。

『それは左樣でございませうね、亡くなつた左圍次は一滴も飲まないで居て如彼に醉拂ひが巧かつたもの、恰度あれと同じでせうね』

芝居好の老妓が云つた。

『ウム却々話せる事を云ふね、君この連中だつて又參考だよは、、、』

『さんこうッて何？降參？』

雛妓が突飛な事を云つて又賑やかな笑ひになる。

信明は坐を立つた、清香は隨いて行くと遙かに離れた座敷の緣側に伴つて。

『オイ又一人賴むぜ』

『賴むッて何……御前』

『解りさうなものぢやないか、あの男に一人押付けて欲しいのさ』

『神木さんに、ほ、は妾いつも同じ役廻りね、大野さんも……罪だわ』

『大野の樣に骨は折らさん、今度のは譯はないよ、誰でも可い、お前の妹分が來て居るぢやないか、少し軟かくして貰へば可いのさ、お禮をする』

『御前のお禮なら前金よ』

『はッは、、、左樣蔑視るなよ……今度のは大丈夫だ妹から出すのだから』

『お嬢樣から……何故』

『ウ……それか』

と信明は辷らした詞を悔むやうに。

『オイ清香、大野の秘密と同じだから決して漏す事は出來んぞ』

『又あんな事を……大野さんの事でも何時漏らして？そんなに疑つて被居るのなら賴まれないわ』

『憤るなよ』

と聲を低うして。

『妹が儲け仕事にかかつて居るのさ、巽の馬鹿姫ね、あれが何いふ機みかあの神木に惚れて逆上て居るのだ、あんな低能だから緣さへあればお持參金澤山で嫁る伯爵夫婦の考へた、それ

で神木さへ口説き落せば可いのだが、低能といふのので一寸骨を折らせるので妹も困つてるのぢや、そこで俺がこれから女房なざ馬鹿でも不具でも不自由の無いものだといふ事を彼の男に敎へて遣るのさ、馬鹿姫を頂戴しなければならない窮迫まで連れて行けア可いのだ、大野に渡した金を小仙に盜ませた骨折に較べれば譯は無らう』

清香は四邊を見廻はして身を竦める。

『モウあの事を云つちや厭ですよ……惡い事をしたと思つて妾今でも寢覺めが惡いのよ』

『は、、何が惡い事があるものか、惡い事といふのは被害者が無けりやならぬあの爲に大野は貧乏な民友黨と惡緣を切つて今ぢや大金儲けにかかつて居る、小仙はお禮をタンマリ捉んで今ぢや好きな男と馬關とかに居るといふぢやあないか俺の仕事は斯な手際さ』

『だつて……あれから大野さんは奧樣を離緣して了つたんでッてね』

『そんな事は先方の家庭の事ぢやないか此方が知つて堪るものかね』

『男の子達もあつたのですッてね』

清香は好い機會と素知らぬ顏で尋ねた。

『ムウ子供がある……、お前まだ知らんのか……妹から何も聞んのかね』

(三〇)

大野の子供の事を妹から何も聞んかといふ信明の詞に、清香は自分の探る物に手の届いた喜びを隱して。

『妾に危險い仕事は爲せて置いて後の事なざ隱して些とも聞かせては下さらないもの……』

と怨じて睨んだ美しい眼の色は信明の心に泌む。

『隱しはせんさ、俺も餘りそんな事は知らん方だが妹がね』

『お孃樣が？、お孃樣何なすつたの』

『妹が其子供を引取つて世話をして居るさうだがね』

『お孃樣が？、まあ、能くそんなお世話をなさいますねえ』

と故意と感心する。

『それは世話をする理由があるだらうよ、大野は獨身で大金持になりかけて居るのだからね、所が先生弱つてるのさ、却々云ふ事を肯ん子供で手に負へないと云つて聲を上げて俺に泣付

いてるのぢや、俺は其子供を彼の神木に預けて遣らうかと思ふ』

『神木さんに？』

と云つて思はず高まつた聲の調子に氣付れまじと笑ひに紛らした。

『ほゝほそれ位ゐの事は當然だわ、お嬢樣の媒介で貧乏書生が一足飛びに伯爵の嬢樣のお婿さんになれるのだから……、馬鹿だつて何だつて財産さへ添けて貰へればねゝ』

『左樣だらう、だから俺は然うして遣らうと思ふのさ、それには彼の男を充分此方の物にせんとね』

『妾働きますわ、お嬢樣からお禮が出るのなら賴しいから引受けて働きますわ』

『現金な事をいふね、まあ遣つて呉れ、成功報酬はウンと出させる』

『貰つて下さいよ、そんなのならお嬢樣は儲かつた上に荷が下りてそして大野さんとお目出度ですわね……御前のお妹樣だわねゝ恐れ入つ了うわ』

『俺よりも上手かも知れんお前もチト敎はつて金儲けをするが可い、俺が助かるはッはゝゝ、』

『左樣しませうねほゝほ』

『可いかね、誰でも可いから藝妓を……女より酒で先づ痛めて呉れ、大分弱つてる樣だからモ少し强いたら倒れて了うよ、倒れたら俺は引上げるからね』

『御前お歸りになるの？』

『ウゝ今夜は歸らうぢやないか妹が居る』

『嬢樣獨り歸しちや可けないこと』

と本意無さそうに云つて、心の中では反對の返詞を手を合せて祈つた。

『結果を見に明日の晩來る、可いかね賴むぜ』

『大丈夫、骨拔のお料理拵へて置きますわ』

『はゝゝ、ぢやア酒だけ俺がモウ少し加勢して遣うか』

信明と清香が座敷へ入つた時は直也は喜代子の爲に又酒を强いられ苦しい顏をして居た。

『貴方お苦しいの、お苦しければ暫時彼方の座敷でお横にねゝ』

斯云つた清香の目に何か語つて居るのが直也に能く通じた。

『君、左樣するが可い、我輩はモウ少し醉はんと歸れん、歸る時は誘ふからね』

『左樣遊ばせよ』

と清香は又他の目を避けて一寸胸を指した。

『非常に苦しいです、ぢや一寸失敬』

と云つて立上る、清香が其手を執る樣にして室外へ出た。

女中が心得て離座敷に入れて水を運んで去つた。

『榊樣ッ』

『清香さん』

両人は顏を見合せて詞に云へぬ感情を語つた、清香は涙を拭いて。

『榊樣お喜びなさいまし、あの薫さんは貴方の手に渡りますよ』

『エッ』

『詳しい事は後から話しますからね、貴方今夜は妾の云ふ通りになつて居て下さらなけァ可けないのよ』

(三一)

待合の夜は更けた、更けた夜を密々と一室に語り合ふのは清香と直也である。

『……あの足らぬ嬢樣を貴方に押付けて中間に立つて甘い事をしやうといふ魂膽だわね』

『ウムその事は僕にも解つた、露骨に僕に向つて云つたのだからね、その爲に僕を別莊へ引張込んだのだ、低能といふ事はまだ云はないがね、頻りに金や地位の得られる事を仄かせて僕を動かす事に努めて居るのだ、實に憎みても餘りある奴ぢや、僕は何度も正體を現はして制裁を加へて遣らうかと思つたのだが……折角敵の本陣まで入つて何の得るところも無く……反つて夫人や子供を助ふ上に妨害を招くだらうと思つて苦痛を堪へて居るのぢや……』

『貴方の樣な美しいお精神にはねえ、お辛いことだらうとお察し申しますわ』

『靜かな向嶋の別莊が牢獄に居る苦痛ぢや、僕は夜も碌に安眠が出來ん、大野廣之が歸つて來る迄に一度びあの小供を連出して綾子夫人に遇はせたい……病氣は何か……小供に遇ひたい煩悶は直ちにあの病氣に障る……早く遇はせたいと心は急くが其機會が來ぬ……と云つて此

上僕には自分を沒する事は出來んのぢや』

『妾もあれからねね、何とかして連れ出す工風は無いか知らと度々行つては見ましたがね、此頃は薫さんも自棄になつて隙さへあつたら逃げ出さうとするらしいのですよ、それで、一室に幽閉同樣で顏を見る事も出來ないのですもの、喜代子さんが困つてるッて話と思ひ當りますわね』

『……子を呼ぶ瀕死の母……母を慕ふ監禁の子……か、清香さん世の中には實に有り得べからざる事ばかりが有る』

と云つて直也は慘然として天井を仰いだ。

『斯して僕がこんな不潔な待合……酒肉の間に空しく過す時間は綾子夫人や薫少年の爲には刻々に運命の果に墜ちる時間ぢや、强い惡人が歡樂に耽つて居る時が弱い善人が辛酸に泣いて居る時ぢや、あゝ斯して居ては僕は濟ん』

心氣昂奮して我を忘れて起上らうとする直也。

『榊樣、貴方惡黨になつて下さいよ』

『……』

清香の詞が餘りに突飛だつたので直也は默つて顏を見る。

『貴方はイカニ母子の方を救ふ爲だつて伯爵の令孃を欺く事は出來んと仰有るわね、だけど今こゝで貴方が充分佐藤さんや喜代子さんの心を許させさへすれば薫さんは明日の日にだつて貴方の手に渡りますわ』

『其心を許させる爲なら放蕩の眞似も遣らう、金で僕の心が縛られると思ふのなら金が欲しい顏もしよう、夫人母子の爲には身命を捧げても救はうと決心したからには何でも遣る、其覺悟は有つて居るのぢやが、伯爵の令孃と虛僞の戀を結ぶ、そんな事は此榊直也には生を變へても出來ぬ、それをしなければ佐藤兄妹が油斷せぬといふのなら止むを得ない、他の手段を考へるより詮術が無い……』

『他と云つても此他には……それで貴方惡黨になつて下さいといふのは』

『惡黨になれとは何いふ意味だね』

『喜代子さんも佐藤さんも貴方を善人と思へばこそ黃金で靡けやうとしたり伯爵の令孃を押付けたりするのでせう、始めから惡人と思へばそんな遠廻しな事をしないで魂膽を打明て一緒に惡い事の相談をしやうぢやありませんか、善人の貴方を使つて甘い事を爲たり秘密な事を

頼みたいと思ふから何處までも惡黨を包んで道理らしく說き伏せる積りでせう、先方も骨が折れる代りに此方だつて隙が取れますわね、だからこゝらで貴方が充分先方の秘密を握つて了つて置いて、實は今迄猫を被つて居たがといふ風に一度先方の荒肝を奪つて遣つて、改めて味方になつて共謀で遣らうといふ事にしたら妾イッヲ事が早くは無か知らんと思ひますわ

それだつたら足らはぬ伯爵の令孃を無理に貴方に押付ける事は出來ないから何とか又變つた相談を爲ますわね、令孃に傷をつけないで仕事は運ぶと思ひますの』

『ウムそれは可い計略だらう、併し今の所では僕はまだ表面彼等の秘密を握つて居る譯ぢや……君に聞いて知つたのだから……』

『清香に聞いたと仰有いよ』

其聲は戯談の樣には無つた。

（三一）

『清香に聞いたと仰有い』と云つて手を突くと。

『何も彼も秘密の惡事は悉皆妾から聞いたと仰有つて下さい……まだ〳〵妾貴方に聞かせる事があるのよ』

清香の樣子が變なので直也は其顏を覗き込む、美しい顏を染めた醉はモウ消えて亂れた髪の二筋三筋蒼白い頰にかゝる。

『清香さん戯談を云つちや可ん、君に秘密を聞いたことを云はれないぢやないか、そんな事を云たら君の身が大變になる』

『妾大變にしたいのですから……妾大變になりたいのよ……榊樣貴方妾の懺悔を聞いて下さいな』

『懺悔をするといゝのですか』

『はあ、貴方にも大野の奥樣にもあの可愛相な薫さんにも……妾お詫をしなければならない事がありのです』

と云つて清香は身を進ませた。

『大野さんが急に御變心なすつて巽樣にお隨になる樣になつた、事の基因は佐藤さんが間に立つて種々な……策略を爲すつたのですがね、あれが恰度議會で巽さんの新しい黨と大野さん

方の民友黨との衝突の時でした……』

と清香は大野の變心に就て自分が佐藤男爵との關係上の干り知る限りを語つた。

佐藤信明が巽伯の命を承けて廣之を誘惑するには有ゆる陰險な手段を用ひた、最初は待合如月の會見となり漸次に惡辣な工風を凝して遂に敵黨の領袖を擒にしたのであるが主として廣之の心を動搖させたのは阿武鑛山全部の權利を贈與するといふ提供であつた、之が主な餌で之が爲に多年の節を變じて巽伯に降伏したのではあるが、この巨きな餌の前に廣之は屢次躊躇した、後を顧み前を望んで決せざる態度で空しく四五日を過した、此時彼の後から否應なしに變節の坑へ無殘に突落した強い力があつた、それも佐藤男爵の謀計ではあるが其事を干つて働いたのが清香であつた。

『……妾今思ふと實に……自分ながら何してあんな惡事に手傳ひしたらうかと思つて……それでも其時は欺されても居たのですわ、小仙といふ妓が居ましてね……』

顏も藝も二の町ながらそれで仇つぽい所が妙に男を魅きつけ可なり賣つてた小仙といふ女に廣之が關係した、或夜の事であつた、信明は大金らしい袱紗包を酒の座で廣之に渡した、其から時至つて後信明は別室に自分と一緒に眠つた清香を起して恐ろしい相談を始めた、宵に廣之に

渡した大金を小仙が拐帶した狂言を書いて呉れぬか、あの金は百圓紙幣で五千圓ある、巧く遣つたら其中の千圓を謝禮として小仙に遣る、其代り何處か遠い所へ暫時身を隱して呉れ、警察沙汰には決して爲ぬ、彼金は巽伯から廣之に預けた金で返る時は自分の懷中に入るのだから決して盜賊沙汰にはならぬ、小仙へ此事を承諾させて呉れたら清香にも望み通りの報酬をとらせる……。

「其時始めは大野さんと佐藤さんとの仲ですし一時の諜伏位ゐに思つたのですけど、お禮だつて千圓といふ大金でせう、これは佐藤さんが大野さんを決心させる爲に金を無くして困らせるんだな……と氣が注かないぢやなかつたのです……それに妾まあ何といふ心でしたか……ウカ〳〵と小仙に勸めてね、本人は千圓のお金を貰つて警察沙汰にならないといふのでせう元々戀でも何でもない眞の客ですわね、大野さんが一寸預けた間に失敬して佐藤さんに渡すと千圓のお禮を受取つて嬉し喜んで情夫と両人が手を取つてドロンを極めて了つたのです、それが知れた時の大野さんの顏は眞青でしたわ』

と清香は當時の事を現然と思ひ出して自分も青い顏をした。

〔三三〕

切ない罪の當時の事を語り畢つて清香は面目なげに俯向いた。

『斯な事も貴方や音藏さんがあの奥様や薫さんの事で美しい誠實を盡し合て被居のを見なければ妾まだ自分の犯した罪に氣が付かないかも知れないのは……見る事聞くこと皆な嘘と欺し合ひが當然になつて居る遊廓の内しか見ない淺ましさでせうね……何でもない事の樣に思つて爲た事が其時あのお金が無くならなかつたら大野さんは御變心なさらないかも知れませんわね、大野さんのお心が變らなかつたらお可愛相な奥樣や薫さんが今の樣な悲しい目にお遇ひの事はないだらうと思ふと……妾モウ此頃は自分の罪に責められて……苦しい切ない思ひをして居るのです……榊樣萬望お許しなすッて』

と疊にべタリと泣き伏した。

『フムそんな事があつたのか……ぢやア大野は全く金で買はれたのだね』

『あの方のお國に何とかいふ鑛山があるのですッてね、巽樣の所有だつたのを大野さんに全部

擲斗をつけて上げたのでせう、今夜佐藤さんが大野は今大金儲にかゝつて居ると云つたのは屹度其事ですわ、今歸つて被居るわね』

『ウム山口縣へ旅行して居る……左樣かそれで事情が能く判つた……』

『今度歸つたら喜代子さんと結婚する積なのでせうよ』

『喜代子の奴め鑛山に戀して居るのぢやな……それで薫を捉まへて居るのかはッはゝゝゝイヤ清香さん、君の懺悔で事情が極めて明白になつた、懺悔すれば罪は消ねる、君が今僕に力を添ねて下さるので彼な惡黨らが僕を大野家に關係のある榊直也と知らないで居るのぢや、これで君の罪は立派に償はれて居る』

『イヱ榊樣、妾まだ罪は消ねたと思ひません、あんな惡黨の……貴方達のお精神に較べて卑しいとも情ないとも…云ひやうの無い佐藤さんに身を任せて居る間は……深い罪は消ねないのですから貴方萬望妾の罪を消して下さいましあの佐藤さんと緣を切つてくださいまし』

直也は困つた顏をして。

『そんな事は僕には……』

『貴方でなけりや出來ないのです、今云つた秘密を悉皆妾がお喋舌した事にして下すつたら何

もしないでも妾と佐藤さんは切れるぢやありませんか』

『……』

『ねゝ榊様、後生ですから妾…妾の今の切ないのを助けると思つて貴方左様して下さいよ、ねえ』

『そんな…今君男爵と切れたら困りやしないかね……困るだらう君が……』

『……貴方妾が憎いと思はないで……そんな……そんなに思つて下さるの』

『……忽ち君が困る様な事があつても……僕達に力があると可いのだけれど』

飾らぬ詞で云つた直也の一言が佐藤男爵が積む黄金の光よりも、遙かに深く嬉しく清香の胸を照した。

『ほゝほ妾些とも困りやしませんの、そんな事心配しないで下さい……何な苦勞があつたつて妾貴方の今のお詞で……ほゝほ』

と云つて俯向いた顏は青い頰に薄い紅が潮す。

『これだけの秘密を握つた貴方が惡黨の風をして兄妹を荒肝を挫いた上で改めて味方になると仰有つたら、一方の儲け仕事がある上に薫さんに困つて居る時だから喜んでお賴みするに違

ひありませんよ、薫さんが手に入ったら又その上の工風がねえ』

『ウム君が犧牲になつてさへ呉ればそれで短兵急に攻め寄せた方が早いかも知れんな、子供を手に入れるには』

『薫さんを待つて被居る奥様のお心を思ふとねゝ』

『左様ぢや、萬一かの事があつたら僕は實に夫人や音藏に對して……ぢやア僕彼等以上の大惡黨になつて見やうッ』

（三四）

翌の日の夕方約の如く佐藤男爵は唯ひとり如月の門を潜つた、そして待合して居る筈の清香を求めた、するとお氣に入りの女中が出て來て信明が顏の色を變へて驚くほどの報告に及んだ、信明は驚いて暫時の間默つて居た、奥の二階ではナル程三味線を入れて陽氣に騷ぐ音……その中に美い聲の清香の歌も聞ゐる。

『兎も角俺が來たと云つて清香を此處へ呼んで呉れ』

女中が行くと程なく廊下を歩むのは清香らしい……遙か彼方のほとゝぎす…と今座敷で歌つてた吾妻八景か何かの文句を四邊構はぬ大きな聲。

『オヤ御前入つしやいほゝほゝほゝ、貴方にそんな實があつたのね』

と裾も亂吹なく醉ふた身體を現はした。

『清香…其方は何したのぢや』

と信明は疑惑と憤怒を含む激しい聲で云つた。

『ほゝほゝ何したつて…御前妾何かしたやうに見ゐて』

『昨夜の約束を何したのぢや、あれ程賴んで置いた事を、其方は誰も他の藝妓を……他の女を皆返して了つて其方だけが泊つたといふぢや無いか……藝妓を一人あの男にッて云つた事を其方は何と聞いたかッ』

『ほゝほゝ神木さんに藝妓をッてのでせう妾チャンと計らつてよ』

『嘘をつくな、誰を……誰だ、何といふ藝妓だ』

『ほゝほゝそれはねえ、御前堪忍遊ばせ其藝妓清香ッていふの』

『ナニ』

と信明は鼻眼鏡も飛ばんばかり身を震はせて怒つた。

『清香ッ、其方は俺を愚弄するな、馬鹿な事をすると承知しないぞ』

『承知しないと……仰有てもモウ出來た後は詮術が無いわねえ、御前堪忍遊ばせ……』

『其方は醉つて居るな……出來たとは何が出來たのだ』

『あの神木さんと出來て了つたの、ほゝほゝ』

信明はまさかと疑つた事を本人の口からズキリと云はれて呆れて居る。

『木乃伊取りが木乃伊に取られるッて云ひます、わね御前、妾昨夜あの目に遇つたのよ……口惜しいと思つた時はモウ後の祭……ほゝほゝ妾達にも斯な不覺があるのねね……』

『何をいふのか……其方があの神木に身を任せたといふのか』

『はあ身も任せた序に心も任せて了つたの、御前怒らずに聞いて下さいよ』

清香は體躰を崩して自棄に座つた。

『……長い間御前のお世話になつてましたけどね、考へると妾御前の樣な實の無い方は厭になつ了つたの……何故つて御前の心にお問ひになつたら解るわね、あの大野さんの時なぞは妾死ぬる樣な苦しい思ひをして御前の爲に働いたのよ、それにあの時約束のお禮だつて今に置

き下さらないし…昨夜のお話ぢや孃樣が大野の坊チャンを世話して夫人の後釜に坐るんだッて、そんな甘い事は御前や孃樣が勝手になさつて、埋らない犬骨折ばかり爲せられるんぢやいかにお客の玩弄に出來てる藝妓稼業だつて些たア算盤も持ちますわね……世間や朋輩からは御華族の持物だの男爵の寵妓だのと羨まれたつて身に着く福も德も有りアしませんからね妾昨夜の話を聞いてからフッと御前に愛想が盡きたのよ』

信明は默つて居る。

『そこへあの神木さんね、あの方の深切さうなのが……妾醉つて介抱を受けた迄は覺ねてますが……何だか自分でも解らないのがこれが眞の戀といふのでせうねね』

『清香、其方は面眞目にそれを云つてるのだな』

『大眞面目よ、他の妓なら逃げ隱れもする所でせうが妾そんな事は厭ひだから明白々に云ひに來たのよ』

(三五)

信明は冷かに嘲つた。

『俺に愛想が盡きたといふのだなはッはは、其方ばかりが藝妓ぢや無い、俺は遊ぶに不自由をする男ぢやないがね……馬鹿な奴だ、折角今迄骨を折つて俺の爲に働いて呉れて、俺が成功したら其方に一番に報いて遣る積りだつたのに……』

『ほゝほ今迄は御前の其口車に乘つてたのよモウ可ござんすから折角他をお探しなさいませ』

『オウ口車か玉の輿か、今に後悔するなッ』

と罵しつたが急に勢ひが碎けて。

『俺も其方には大分惚れて居たと見ねるな、未練らしい事を云つたねはッはゝはゝ清香切れるなら奇麗に別れやう』

と懷中を探つて紙入を取出した。

『御前妾切れるッたつてお心付なざア欲しくありませんよ』

『まあ左様いふな、切れたつて俺も新橋へは來る……お前には種々頼んだ事もあつたつけ』
云ひながら紙幣を紙に疊む。
『ほゝほ體の可い事を云つて……秘密の口止め料と仰有いよ潔ぎよく』
『野暮な聲を出すな』
と云つた時襖がサッと明いた。
『僕も其口止め料を貰ほう』
聲をかけて入つて來たのは直也の神木朱衣であつた、流石の信明が顏色を變へた。
『男爵、閣下の秘密は此女から僕の此胸へ全部移轉したですぞはッはゝゝゝ』
『あら貴郎そんな……』
と清香は呆氣にとられた顏をする。
『はッはゝゝゝ云はん約束ぢやつたが僕も口止め料が欲しくなつた』
『まあ……それぢや貴郎も矢張し惡黨ねゝ』
『惡黨か善人か知らん、男爵の看板と文士の商標とが違ふばかりぢや、金儲けの爲には筆の先で人の活殺を司る僕ぢや、男爵閣下、閣下には此原稿の掲題だけ讀んで聞さう』

と懐中から出した皺だらけの紙を展げて
『事實小説如月物語……之が小説の題號です、内容は玆に佐藤信明といふ一人の男爵がある、權謀術數に長じた現代的の大奸物だ、此男爵が主と頼む巽伯爵の爲に……』
『オイ君ッ』
信明の聲を耳に入れず。
『民友黨の名士大野廣之を買收した陰險極まる大事實これを全篇の骨子として男爵の妹喜代が殘忍なる……』
『コラ君ッ止さんか』
『閣下マアお聞きなさい、これから情景最も備はる大眼目です、其喜代子は自己の卑しむべき戀を遂げんが爲に大野廣之の一子薫が我家に監禁して……』
信明は立上つた、ッカ〳〵と直也の傍へ進むと靜かに其袂を取つて。
『オイ君、そんな野暮な眞似をしないでも可いぢやないか、君も惡黨らしくない事をする、マア座りたまへ、靜かに話しで判る事ぢやないか君、座つて呉れたまへ』
『座るとも立とも閣下のお心任せです』

と胡座をかいた。

『……清香ッ其方は俺の秘密を神木君に喋舌たね……』

『……妾云つた事は云つたけれど……そんな方とは知らないで……御前勘忍して下さいよ』

と疊に俯伏した、青い顔をした信明は其姿を忌々しうさに睨んだが、氣を轉へて直也に對つた

『我輩は公私多方面に渉つて事業を有つ爲に種々な權謀も術數も要る……それが直ちに罪惡となるべきぢやない、併し秘密は秘密である……我輩の秘密を握つて君は何しやうといふのだ』

『先づ此小説の版權を閣下に讓與しませうか』

と云つて直也は空嘯いた。

(三六)

向嶋の佐藤男爵別莊の二階は今日は直也の朱衣一人ぢやなかつた、若葉の門内に自働車を待して信明兄妹は左右から直也を挾んで語つて居る、昨夜深更に巽邸に妹を訪ふた信明は今朝早

くから連立つて此處へ來たのである、兄も妹も思はぬ失敗に惱む氣勢は沈んだ色に現はれた、信明は低い調子で。

『それで君の態度をモウ少し明白にして呉れたまへな、飽くまで吾輩兄妹を敵にして鬪ふといふのか、それとも條件に依ては味方になつて協力して遣らうといふのか』

『それは貴方らの任意の選擇です、僕は何方になつても損はしない』

『損は無いさ、君は今我輩らに對して全然勝者の地位に居るから……、併しだね、此處を能く君に熟考して貰ひたいのだ、君が我輩らの秘密を武器にして何しても鬪うと云へば此方だつて止むを得ない、極力其防禦手段を取る、我輩が存亡を賭した努力は君に當るに堪へやうぢやないか……が我輩は實にそれを望まない、出來得るならば穩當な妥協を遂げたいは鬪ふよりも握手したい』

『握手といふと』

『我輩らの味方になつて欲しいのです』

『僕も敢て鬪ひたくはない、有望な貴方達を助けるのも面白い……がそれは條件一つだ、貴方らの提供する條件に依て僕の去就を決しやう』

『ウムぢやア お互の間にはまだ一縷の希望があるね』
と信明は聊か勢ひを加へた。
『それぢや條件に移らうぢやないか』
『二つに別けて下さい、先づ巽伯爵の馬鹿令嬢を蕩して卷上る……次に大野廣之の子供を秘密に預かる、これだけを僕の仕事にさせやうといふのでしたらう、それを遣らう、それを其儘僕が受持つても可いです』
『卷上げるといふと甚だ……實際君そんな仰山な事は無いよ、大野の子供だつてこれが殺すとか生かすとかいふのぢやないからね、唯暫時秘密に保護して逃さん樣にして貰へば可いのだから……』
『はッはゝゝゝ貴方達はまだ僕に對して惡黨の正躰を隱さうとするね、それが可けないのだ、モウ此話は僕が握つて居る、實際これ〳〵の儲けがあるといふ事を打明けて交渉して下さいそれでないと僕の方の算盤も持てぬ』
喜代子は口惜しさうに顏を上げた。
『貴方どんな條件なら應じて下さるの』

『萬と云つても億と云つても拒む事は出來ないでせうはッはゝゝゝ、併し窮鳥懷に入るぢや佐藤さん二千圓お出しなさいッ』
『二千圓?』
と喜代子は驚いた。
『両方で二千圓……千圓宛なら安い物ですぞ、大野廣之に與へた金を盜ませた藝妓に千圓遣つたぢやないですか、あれに較べれば相場を外れて居る』
『ヨシ二千圓出さう』
と信明は決然と云つた。
『奇麗に二千圓出すがそれは成功報酬だよ』
『五百圓手附を渡しなさい』
喜代子は泣きさうな顏をして居る、信明は頷いて。
『それは出さう、其代り君我輩ら兄妹の爲に最善の味方となつて呉れるだらうね』
『無論です、總てを助けませう』
『あゝそれで話が纏つた』

ホッと息する兄を情なさゝうに見て。

『だつて……そんなにお金が入りアしないわ』

妹の愚痴を慰めて信明は笑つた。

『は、、、お前が斯な……神木君を引張つて來たのはお前ぢやないか、まあ可いさ、君の樣な根強い味方があると大いに賴しい、今からでも厄介な子供が預けられる』

『それは有難いけれど……神木さん貴方だけには欺されたわねえ』

『お前ばかりぢやない、俺も生來始めての不覺ぢや……文士の君が頭巾を脫うとは流石の我輩も看破する事が出來んかつたは、、、』

『惡黨だわねゝ』

直也は吹飛ばす樣に笑つた。

『はッは、、、、、喜代子さん、惡黨の名は貴女に返上しやうは、、、』

(三七)

『惡黨の讓りッ競をしても始まらん』

と信明は笑つて。

『それよりもお互ひに握手したらスグ仕事にかゝるが可い、三人一致なら何でも出來る、大野が吉報を齎らして歸る迄に此方も成績を擧げて置かなければならぬ、何方から着手するかね』

と妹を顧る。

『何方も急ぐのだけど……妾あの子を除つて貰はなけれア身動きが出來ないもの』

『ぢや子供から片附けるが可い、神木君、君此處で小供を預かつて呉れ、可いかね、今の手附は子供と一緒に渡さう』

『可しい、大丈夫です、逃しさへしなけれア可でせう』

『普通の子供ぢや無いのよ……』

『煩く母を慕ふて隙さへあれば逃げ出さうとしてるさうだ、それにまだ何とか云つたな、家庭教師は』

『榊直也ッて男』

『ウン榊か、それが夫人の不義の相手だな、母と其男を慕ふて些とも此妹に從はぬのでね、滅多な所へ預けて逃げられるか母に奪られては困るから』

『僕が預つたら大丈夫だが……預る期限は何時までとするのです、そんな生物を無期限で遣られちや困る』

『期限かね、期限と云つて確かに極める事は出來んが、大野廣之といふ其子の父親が今旅行してるからそれが歸つて此妹との結婚が濟んだら引取る事になるだらう、ねねお前』

『……だけれど妾彼な不具の繼子なぞ厭な事よ……』

『それは夫婦で相談するさ、まあ假に左樣して置かうぢやないか』

『厭な子供だけれど逃す事は出來ない？、ッマリ人質だね、人質に押へて置くのですな』

と直也は問ふた。

『マアそんなものさ、其奴を引取る事に依て此妹と大野との戀が成立つたと云つても可いのだ』

『戀は甘辛いといふ語があるはッはゝゝは、が喜代子さん、これからは僕が番をするから甘い方ばかりお味ひなさい』

『はゝゝゝ其代り君はあの馬鹿姫を甘く綾したまへ』

『僕だつて馬鹿ぢやア手を出す勇氣が爲い、併し引受けたのだから何とかするです……マア當分は甘く交際で釣るのだ、その方が喜代子さんは反つて收入になるでせう』

『モウ長い間引ッ張つてあるのだものねえ……』

『惚れられたのが因果と諦めて目を瞑るさ……口直しがあるぢやないか清香といふ？』

と云つて信明は厭な笑ひをした。

『彼女はあれ限りです、僕そんな物に執着はしない、貴方又愛してお遣んなさい』

『馬鹿な、彼な女とは思はなんだが……あれも生來の不覺の追加さ』

『兄樣が惚いからよ斯な事になるのは』

『兄樣も惡いお前も惡い……神木君はモウ一つ惡いのだはゝゝゝ、ぢやア子供を何して渡すかね』

直也は之には答へなかつた……。

『此處へ連れて來ても可いけれど途中で……』

『僕受取りに行きませう』

と云つて。

『僕だつて白晝そんな危險な子供を連れて歩く事は出來ん、夜……早いが可けれア今夜でも人が寢た頃に迎ひに行くです、表まで出して下さい』

『ちや斯しませうね、今夜十一時が鳴つたらスグあの裏門の所へ連れて出ますから』

『可しい、僕車を雇ふて門外で待つて居るです、其時に可いでせうな約束の手附は』

『渡すさ、左樣君嚴重に云はんでも可い安心したまへ』

『それが僕の目的ですからな、それが無くて厄介な不具者の子供なぞ誰が迎ひに行くものかはッはゝゝゝ』

(三八)

疲れ切つた足取りで車夫が行く、斜に空を指して轅棒の上に十日ばかりの月がかかる、水道橋を渡つて其畔に下しかけたが、氣を換へて又煩げに曳き出した、と前路を遮るやうに立つた姿

『御都合までいかゞさま』

腰を屈めた車夫は顏を覗いた。

『旦那お伴を…お安くいかゞさまで』

『……』

『ね旦那御都合まで』

と再び覗く車夫、帽子を取ると。

『はッはゝゝゝ音藏僕ぢや』

車夫は驚いて。

『オ、榊の旦那ッ』

『僕といふ事が一寸判らんかね』

直也は顔を埋めたあの濃い髯を奇麗に剃り落して居る、月に對つて立つた顔は別人の樣である

音藏は懷かしげに傍へ寄つて。

『髯が無いので全く見違える樣で……何して被居るだらうツて奥樣とお噂ばかりしてるのでご

ぜいます』

『夫人の病狀も格別は無いのだね、報知が來ぬから安心して居る』

と低い聲で云つて四邊を見る。

『モウ何時だ』

『今彼所の大時計が九時を打つた所です……旦那何方へ』

『今夫人の所へ出掛ける途中だが……九時…十時…十一時と、まだ二時間あるな、此處から芝

の巽の邸までどれ位ゐ費るね』

『巽の邸へ？走れア譯はありません』

『イヤ君と話をしながら歩かう、僕に隨いて來るが可い、ナル可く寂しい所を歩かう』

『ヘイ』

と音藏は怪訝な顔をして。

『御用なら乘つて下せいまし一走でさ』

『イヤ君の車に乘ちや罰が當る、乘らいでも可い……君、髯が無いと僕といふ事は一寸判らん

かね』

『ヘエ俺が面喰つた位ゐでごぜいますからね』

『可し、それで可い』

と青い剃痕を撫ぜながら歩む。

『君喜んで呉れ、今夜といふ今夜は手に入つたぞ』

『ヘ……』

「これから君と両人で薫君を迎ひに行くのぢや』

『エッ』

音藏は車を後ろへ離さんばかり、仰反るやうに驚いた。

『向うへ行けばチャンと渡して呉れる手順になつて居る、君の車へ乘せて夫人の所へ引返さ

う』

『……旦那……そ…それは眞の……眞の事でございますかッ』
と突然車を置いた。
『眞實ぢや、隨いて來たら判る、話は長いが後で緩りしやう、種々の事があつたが薫君を僕の手で保護するといふ所まで漕ぎつけたのぢや』
『榊の旦那…俺ア何だか斯う……歩けねいやうで……』
『はゝゝゝ左樣だらう』
と直也も胸の塞がる氣で。
『夫人に遇はせたら喜ぶだらう…さ行う行きさへすれば遇へる』
『へイ』
と帶をグッと締め直す。
『旦那、乘つて下せい乘つて……俺ア迚も……これが走らずに居られるものぢやアごせいません』
膝掛を取つて横に立つ、息を强ます樣子を見て、直也は我知らず催さるゝ涙を拭いた。
『君も遇ひたからうが……僕も見たいのぢや』

(三九)

月は落ちて芝山内の夜は暗く更けて行く乘らねば動かぬ音藏の車で直也は巽邸近く來た、下り立つと。
『君は喜代子に顏を知られて居るだらう其笠を深く冠つて決して顏を見せちや可ん、それから念の爲に其提灯の字が見えないやうにな』
『へイ合羽を被せやせう』
と筥を探る。
『僕が心配してるのは僕の顏を見て薫君が物を云ふだらうと思つてな、僕はそれで髯を剃つたのぢや……門の外へ出す約束ぢやが……萬一僕の名を呼ぶ樣な事があつたら非常手段を遣る聲を立てさせんやうにして早く連れて退きさへすれば可い、僕が車へ乘せたら、君は出來るだけ走つて與れ、何方へでも可いから』
『先方が變に思やしませんかね』

『先方は大丈夫だ、變にも何にも思ふ事の出來ない樣にしてある唯心配なのは薫君ぢや、僕も君も覺られて名を呼ばれたら苦心も水泡ぢやからな』

『そいつァ……』

と音藏も胸を抱いた。

僕に手渡しでなけれァ先方が渡さんのだからね……』

『あの表門でごせいますか』

『イヤ裏門ぢや、喜代子の家が直ぐぢや』

『裏門なら暗いかも知れませんせ、俺ァ一走り樣子を見て來やせう』

『覺られちや可んぞ』

駈出した音藏はスグ歸つて來て。

『旦那彼所なら巧く遣れば……暗い上に小さな開戸ですせ』

『左樣か……何でも可い、勇氣ぢや』

と直也は闇の中で腕を振つた。

微かに高い電燈が一つ、此光は枝を伸した松に遮られて巽邸の裏門は薄黑色に暗かつた。

『こゝらに置きませうか』

『ウン此處が可い』

と兩人は地を潛る思ひで門前に手配りをした。

時計が鳴つた、確かに十一。

直也は門をコト〳〵と云はせた。

微かな咳拂ひは喜代子の聲である……と思うと直也は怪しう胸が轟いた。

音藏は蹴込みに腰を下したかと思ふと又立つた、立つて歩きかけてはまた屈む。

ガチ〳〵と錠の外れる音がする、スウと冷たい風を吸ふて開戸は中へ明いた、白い顏が半分。

『喜代子さんですか』

『神木さん?』

と透して。

『神木さんぢやないの』

『僕ですよ』

まだ薫を連れて居ないのを確めて。

『はゝゝゝ髯を剃つたからね、變りましたか』

明い門内へヌッと半身を出して見せた。

『ほゝほ妾違ふ人かと思つて吃驚したわ……貴方には能く吃驚させられるわねね』

『子供は起きてるですか、出して下さい、隨分御苦勞な役ですがなア、本來なら貴女が連て來て下さるのが當然だ』

『だつて……其代り此品、兄がお約束したもの』

出された紙包を一寸檢めて。

『百圓紙幣が五枚ですな、確に受取りました』

『子供はね、一寸入つて見て下さいよ、此頃は夜になつたら脱けて出やうとするのですよ、今は能く寢んで居ますがね』

『寢て居るですか、それは可い、途中で泣かれたりしては厄介だから、其儘起さないで僕抱へて行かう』

『車が居ますね』

直也は喜代子の後に隨いて入つた、音藏は蹴込みも碎けんばかり總身の力を祈念に籠めて。

『……成田山不動明王……降三世軍荼利夜叉明王大威德明王金剛夜叉明王……』

《四〇》

直也の前に立つた喜代子は裏庭の方へ案内した、半ば明けた雨戸から弱い光りが漏れる、椽を指して。

『此處から見ねますよ』

『寢て居るのですか』

と直也は椽に手を突いて中硝子の障子を覗く……其手は細かく震えた。

『オ、薫』

心の叫びを嚙しばつて、青い紗の覆布を被せた電燈の光りで屹と見る。白い敷布の上に丸く寢た薫には一枚の毛布が覆ふてあるばかり、其毛布から一筋の赤い細帶が疊を這ふ

『能く寢て居る……あの儘抱いて行う』

直也は急いで椽に上ると靜かに障子を明けた、喜代子は後から。

『其柱の帶を解て下さい』

『ェ帶を』

彼方に向いて寢た痩せた薫の両腕は細帶で堅く縛つて其端が柱に結んであつた、直也は蹌めいて危く上へ倒けかゝり柱を捉まへた。

『……縛つてあるのですか……』

『左樣しなけれァ碌々寢る事も出來ないの……ァ、妾今夜から安眠が出來ますわ』

『ウ、……枕を高くお寢みなさい……』

と急いで帶を解く。

『腕は此儘にして歸つてから解いて遣らう、連れて行きますぞッ』

毛布を除けると矢庭に引抱へて飛ぶやうに庭へ下りた、足の儘にならぬ下駄に懊れ直也は躓いて前へ二三尺、抱いた薫を激しく搖つた、『あッ』と聲をあげた薫はパッチリと眼を開いた、動く身躰を跪きながら、我を抱いた顏を見る、見られまじと直也は横を向いて門へ出る、喜代子も續いて扉の際に立つ、明るい光りをサッと脱ける時、薫は大きな聲で。

『オッ榊先生ッ』

直也は其口へ掌で蓋した。

『失敗つたッ』と音藏は立上る。

『ほゝほゝあんな寢言ばかりいふのですよぢやァ妾又明日伺ひますからね御苦勞樣』

ガラ〳〵と扉は閉つた。

潰れるやうに抱締めてヒラリと直也は車に上る、音藏は『オッ』と喚くと、七八丁を夢心地に飛んだ。

『オイ薫君、僕だッ……榊だッ、確りせい、可いか、夢ぢやないぞ、夢ぢやないぞ』

熱い涙は薫の顏にポト〳〵落ちた。

『矢張先生ッ』

と云つてワッと泣き出した。

『泣いちや可ん、モウ泣く事は要らん、泣くと人が怪しむからな、默つて……可いかい、可いかい、モウ僕と音藏で救ひ出して遣つたから……何も泣く事は無い、今スグお母樣の所へ連れて行くからな』

『坊樣ッ』

と湯のやうな汗を拭きもせず音藏は足を止めて車上を振顧る。

『榊樣、俺にも一寸物を云はせて下せいまし……オ、痩せて……』

『君此手を解いて呉れ、何しても解けん』

『オッ縛つて……』

『逃さん爲に縛つてあつたのぢや』

『チ、チ畜生ッ……』

『音藏』

『ヘイ坊樣……情ねい目にお遇ひなせいましたなァ……』

解かれて自由になつた小さな手は音藏の手を握る。

『此帶は……音藏君此帶を確り預かつて置いて呉れ』

四一

直也と薫を乘せた音藏の車は綾子の詫住居へ歸つた、直也の注意で靜に路次口へ佇つて、薫を

背に背ふた音藏と密々に相談をした、そして病氣の重い氣の弱つて居る綾子を急に過度に喜ばせることは考へ物である、一應直也が遇ふてそれからにした方が可からうといふので、直也が先に入つた。

母親絹子は打續く看病の疲れに衰へが見ねて之も病人の樣である、深夜に不意の直也が訪づれたので驚きながら寢衣を着換へて挨拶をする、苦勞を刻みつけた樣な額の皺を見て暗い燈火と同じ寂しい冷たい老人の心を思ひ遣つて直也は綾子を見ぬ中に痛ましい情に打れた。

豆ランプを枕元の筥に載せ微かな光に痩せた顏を照して綾子は眠つて居る、枕屏風の上から覗くと、蒲團の横には手紙の樣な物の書きかけが硯筥と共に置いてある。

『何か書いて居られるのですな』

『ハィ病氣に障つては可けないと申すのですけれど肯かんのですよ、迚も息のある間に薫に遇ふ事は出來まいから、あの子の一生の爲になる事を書き殘して置いて遺ると申しましてね、苦惱の鎭まつてる時は始終書くのでございますモウ卷紙に二本も書きためてね……』

『……左樣ですか』

『先刻も貴方のお噂をしましてね、手紙にも書いてあるけれど萬一自分が薫に遇はないで死ん

だら、お前の力になる人は榊様の他にないから縁の薄い両親よりも……榊様を大事にする様にッて左様云つて臭れと申しましてね……貴方が御深切にして頂くのをそればかり申して喜んで居るのでございますよ』

『……イヤ左様云はれる程僕の力は何の役にも立つて居ません……併し今夜は善いお家苞を持つて來ましたぞ』

と云つて直也は老人の耳に近く私語いた絹子は屹驚して色を變へると、急に立上つて表の方へ出た、直也も續いて出る。

『お母様……お母様……』

と綾子は目を覺して母を呼んだ、絹子は上り口へ音藏の背から下りて立つた薫の姿を見て駈寄らうとする時病人に呼ばれて、身躰の一つのが口惜しいやうに。

『ハイ、ハイ今行くよ』

と行つて薫に一寸觸る。

『おばあ様』

『これ大きい聲をしては可けません、お母様は病氣だからね』

『今直に遇はせるから待つのだせ』

『薫ぢやありませんかッ』

と綾子の聲は叫ぶ様である、起き上る氣勢、直也は座敷へ入つた。

『奥さん』

『オ、榊様……妾些とも存じないで失禮を致しました』

『詳しい話は後からします、貴女は氣を確り持て下さい、薫君を連れて來たですが此儘貴女の所に置くといふ譯に行んのだから……安心しちや可けませんぞ、まだ安心はなりませんぞ』

『ハイ有難う妾氣は確かでございます、どんな事がありましても病氣を惡くして此上御心配をかける様な事は致しません……』

『可いですな、實は貴女が突然の事だから……喜ばれることが反つて病氣を惡くする様な事になつては可けないと思つて』

『榊様何から何まで御心を……』

綾子は半ば乞つた蒲團の上へ顔を俯伏せ人の誠意を泣いた。

『薫君さあ入りたまへモウ可いから』

『お母様』

轉がる樣に小さな姿は母へ犇と。

『オ、薫ッ』

寢ての夢覺めての現…幻影のみぞ果なくも往きつ來りつ涙に明暮の念ひが届いて嬉しい同情の露に蘇生つた母子草の、抱いては泣き抱かれては泣き人々の袂を絞らせた。

（四二）

綾子は漸く涙を拭くと、薫の顏も奇麗にして遣つて、蒲團の外へ出て直也に對いて手を突いた

『さ薫、お前も整然として改めて榊樣に……先生にお禮を云ふのです』

『先生有難う……』

夢から續いた餘りの嬉しさは幼い少年の心を動顛させた、周圍が漸く意識つて來る。

『先生ッ』

と今度は直也へ行つて膝へ手を置き疑と見上げる。

『先生髯が無いから僕吃驚した……』

『はッはゝゝゝ髯は剃つたのぢや』

『奥樣、今夜坊樣を喜代子の手から取る爲に榊樣は髯をお剃りになつたのでございますよ』

と宵に途中で遇つた事から巽邸の模樣を音藏は詳しく話した。

『これから僕が今日までの話しを爲ませう奥さん、貴女は横になつて下さい、まだ〳〵貴女方の爲に計畫して僕の事業は門口迄も進んで居らん、事業はこれからです、これからいよ〳〵貴女が健康になつて呉んと困る』

と喜びに病を忘れて起きた綾子を勸めて寢させ、佐藤兄妹に近づいた顚末、藝妓清香の同情に依つて彼等の秘密を悉く握つた事、それを武器に薫を此方へ取つた事を落もなく語つた。

『それから之は貴女には隱さうとも思つたのだが……貴女の精神を知つて居る僕だから强いて隱す事はしません、貴女も略想像はされて居るでせう、あの喜代子が何の爲に薫君を……厄介にして困る薫君を引取つて居るかです』

『ハイ妾その事は……最初から疑がつたのでございますが、苟且にも男爵の御令嬢ですし……大野だつて眞逆そんな……と思つて、自分が斯な辛い目に遇つてるからの邪推と思はれては

殘念ですし今日まで口に出した事はないのでございます……』

『貴女ばかりぢやないのです、種々の攻撃や非難はあるが上流社會に如彼な醜惡な奴們が居やうとは僕も實に想像も及ばなかつたです、今度彼等の正體を見極めて僕は眞に泣きましたぞ』

自個を捨て醜惡の眞中に飛込んで居る直也は、堪へに堪へた憤慨を心を許す人々の前に投げ出した。

『善行とか美事とかいふ愉快な消息は皆な平民から出る……淺ましい虛榮と猥らな逸樂の模範は悉く上流社會から傳はるです……兄の信明は黃金の力を以て貴女の夫を誘惑した、妹の喜代子は虛榮を滿足したい爲に貴女の夫を奪つたのだ、喜代子は大野氏と結婚したい爲に薫君を引取つて居るのですぞ』

と語るに忍びぬけれど告げねばならぬ事情である。

『大野氏が貴女を離別して忽ち困つたのは薫君です、それに乘じて巧く自分の計畫を進めた喜代子は、それより以前から既に……何な關係を大野氏と有つて居たかそれは能く判りませんが、兎に角現在は醜い事情があるらしいですそれを公然にしたい事に向つて彼は今力を盡し

て居るのです、厄介な薫君も大野氏に對する嘘僞の同情を見せる爲に自分が保護して居る積だつたのですところが薫君が反抗する、貴女や僕の事を云つて喜代子に惡感を抱かせる、遂には逃走を企てる樣になつたら、元來同情も愛もあるのぢやないから殘酷な虐待を加へる……今夜の如きは縛してあつたのです』

『奥樣、こ、この帶で坊樣の腕を確り縛つてそれを柱に結りつけてあつたさうで』

と音藏は懷中へ大切に藏つた帶を出た。

『まあそんな事を……』

綾子の眼には赤い細帶の色が邪慳に燃ゆる火焔に見ねた。

(四三)

『此處で僕は貴女に聞かねばならぬ事がある』

と直也は改まつて綾子に問ふた。

『貴方は大野氏と喜代子との關係が斯な風に……今云つた如く互ひに結婚を許さうといふとこ

ろまで進んで居る、それに對する貴方の決心を僕に語つて下さい』

綾子は言下に。

『妾それは申すまでもございません、妾は何處までも大野の妻でございますから』

『……併し今の、今の新しい時代の道德と稱へらるゝものはそこまで女に服從を强いないのですぞ』

『妾服從とは思ひません』

と云つて綾子は窪んだ眼を輝かす。

『妾は妻の任務として夫を……夫を助けて共に世間に立つのが當然と想ふのでございます、今夫は確かに迷ふて居るのですから、…妾の信じた夫の精神は物に覆れて隱れて居るのです…隱れて見ねない夫の精神を妻の妾は何處までも探つて……尋ね當て本文の立派な精神を見るのが妾の任務と思ひます、心が代つたから此方も…といふのは夫婦の意味も何も無い……妾餘り淺い考へかと思ふのでございます』

『ウム貴方の其御精神が實に美くしいから僕は微力を盡して居るのですが……その見るから惱ましさうな病苦……薫君に惹さるゝ心の快惱……現在の境遇に居られても貴方はいよ〳〵其

決心を挫きませんな、決して其志を破らないですな』

『榊樣……妾モウ迚も今度の病氣は助からぬと思ひまして……妾の精神を認めた物が母に預けてございます、あれを大野が見て呉れましたら……あれを見て大野が迷を覺して呉れましたら……妾それでも本望でございます……』

『死して悔いないと云ふのですな』

と直也は暗涙を呑んだ。

『妾斯な事を申上げるまでには……實に自分ながら恥かしいと思ふ程迷ふたのでございます……イッソ獨棲になつてと思つたり……薫だけ連れて何處かへ身を隱さうと考へたり……本來の精神は變へない氣で居ながら……グルグル轉る周圍につれて何度となく淺果な迷ひに捉まつたのでございますが……これが女の弱いのでございませう』

涙は止處もなく落ちて枕を濕らす。

『それが今度の病氣で、この病氣で妾迷ふた心も澄み切た樣で……醒覺とでもいふのでございませうか、斯な妾の樣な身躰を……弱い女の身を捧げて夫の精神を以前の立派な……民友黨の名士と世間に信用された以前の大野にする事が出來れば死んでも決して徒死ぢやない…

…とモウそれが心から底から嬉い様な氣になれるのでございます』

直也は深く頷いて。

『尊い御決心です、イヤそれで可しい、それで僕も安心しました、いよ〳〵勇氣を出して猛進されるです、御安心なさい、僕が居る限は大野氏と喜代子の結婚は決して成立させはしない』

『あの阿魔がそんな眞似しやがつたら、其時こそは俺が暴れ込んで二つに引裂いて遣りまさ』

と音藏が痛快な事を云ふ。

『事業はこれからだ、斯うしては居られん、折角遇つたお両人の中を裂くには忍びんが、今覺られては僕の苦心は水泡です、薫君を連れて別莊へ歸りますからね、これからは屢々連れて來て遇はせます、斯いふ風に漸次此方の物になる……正義は最後の勝利ですからな此次には又愉快な報告が出來るかも知れん、心に奮發をつけて早く快ならんと可けませんぞ』

直也は薫を連れて喜代子の別莊へ歸らうとする。薫は籠を扱けた鳥の翼を伸す喜び。

『僕先生と一緒ッ』

『ほ、ほお前は嬉しからうねね……能く先生の仰有る事を聞いてね』

と引寄せて。

『お前もお母様も先生に御苦勞をかけて居るのだよ、この御恩を忘れてはなりませんよ』

薫は『ウン、ウン』と首肯く。

『この前に……高輪へ行く時お前門まで送つて呉れたねね、あれ限だつたわね……』

と悲しい光景を思ひ出して、綾子は當時を其儘の心になり、涌く涙を直也に隱して拭いた。

(四四)

直也が薫を連れて向嶋の別莊へ歸つた其翌の朝、直也にとつては重大事件が持上つたのである車を飛ばせた喜代子は直也両人がまだ寢て居る座敷へ入ると。

『神木さん、神木さん』

と心の動搖に周章しい聲、直也は目を覺した。

薫には能く云含めてある、母や音藏やの人々の他には決して榊先生を云つてはならぬ、何處までも知らぬ他人……喜代子の爲に預けられた恐い人らしう裝ふのだと敎へてある、怜悧い薫は

それを能く會得んで居る……が敵の前に両人が並ぶのはこれが始めである、直也は目を擦りつつ油斷ならぬ思ひに胸を騒せた。

『神木さん泣きはしなくつて？』

『ィヤ隨分弱らせられたですよ……貴方は今頃何したのです、大變早いぢやないですか』

直也は心の落着ね態して座敷の入口に立つて居る喜代子が心配でならぬ。

『妾其子を連れに來たのですよ』

『エッ子供を？』

直也は帶を引締めて座つた。

『昨夜彼時からぬ、終列車で突然大野が歸つて來ましてね』

子供を連れて行くといふ事よりもモ一つ大きな驚愕である、強いて制へて。

『大野廣之……此子の父ですな』

『はあ、急に鑛山の事に就て兄と相談する事があるのですつて』

喜代子はモウ大野を夫と呼ばんばかりである。

『左樣ですか……それで此子を何しやうといふのですか』

『妾それで困つ了つたの、妾の所で大切に預かつてある事になつてるでせう、長らく見ないから今度は一寸遇つて行くと云ふのですよ、矢張子は氣にかゝるのねそんな憎らしい不具の子でも……』

喜代子は忌々しさうに云つた。

『遇つて行く？……』

『今朝遇ひ度といふのよ』

『遇つて行く？……』

と直也は此方の作戰計畫に重大な變動を來す廣之の歸京といふ事を考へ込んだ。

『詮術が無いから妾連れてつて見せて來やうと思ふの』

『何處に居るのです其大野君は』

『高輪の寺田ッて親戚の別莊に居るのです』

直也は廣之の母仲子の事を思出した、喜代子の意中を探るべく。

『僕が連れて行つて見せませうか』

『危險だわ』

と喜代子は首を振つて笑つた。

『何も彼も妾達の秘密をべラ〳〵喋舌られたら大變よ』

『はつは……未だ僕を疑がつて居るですな』

『疑ふつてことないけれど……遇はない方が可いわ』

遇はないのが可いのは此方である、と直也は思ふ坪に入つたのを喜んだ。

『それも左樣ですな、ぢやア僕ア絶對に暗中に居るのですな、暗中で働く黑手組だね……それも貴子方の爲には好都合だらう』

『左樣して下さいよ、そして屹度ね……可ござんすか秘密を守つて下さいよ』

『憂慮しないでも可いです、既に手附金まで貰つた以上だ、漏す樣な事はしないから……貴女は安心して仕事を爲さい、大野君を逃す樣な事はないですかな』

『それは大丈夫、その子は逃げても親は逃がしはしないからほゝほゝゝ』

『鑛山の方は甘く行くですか』

『大變有望だつて、それで當初豫定のとは見込みも大きくなつた代りに資本も多く要るわね、そんな相談に歸つたのでせう』

『すると貴女もいよ〳〵有望ですな……今度結婚するですか』

『そんな……今度はまだそんな運びにはならないの……直に引返すのだから』

『大野君はスグ又彼方へ行くのですか』

『先生ッ』

目を覺ました薫が不意に云つた、直也は蒲團越しに惡いと睨んで。

『はッはゝゝゝ朝まであんな寢言を云ひ續けるですな、オイ目を覺して喜代子さんに挨拶をするんだ、寢呆け奴ッ』

(四五)

漸くにして惡魔の巢を脱れた薫は一夜の夢溫かう過した翌朝再び『恐いおばさん』に抱かれて高輪の寺田の別莊へ連れられた、其處で絶ねて見ぬ父に遇はして遣るといふ詞と直也がそれとなく行つて來いと目顏で知らせなかつたら少年は車に乘るのでは無つたらう。

寺田には父が居つた、薫の大嫌ひな父の母ーおばあさんも居た、奥の離座敷へ連れられて、色

が黒くなつて髯が威相くなつた父を見ると、薫の心は流石に躍つた。

『お父様』

『ウム薫』

と云つた父は母の様に自分を抱き上げて呉れるかと思つて懐しさをニコニコ笑つて立つ。

『其方はお母様に可愛がつて貰つて可いな、幸福者だはッはゝゝ』

廣之の云ふ『母』と薫の思ふ『母』とは違つて居る、薫は父の面を仰いで。

『お父様……お母様病氣よ』

『ナニ』

と云つたが厭な顔をして。

『其方のお母様は此處に居られるぢやないか……病氣ッて誰が病氣だッ、誰から誰の病氣を聞いたのぢや』

父の聲が激しかつたので、直也に止められてる事を氣付いたが、痛ましい母の惱みを父に告げずは居られない。

『……お母様屹度……病氣よ……だつて僕夢に見るんだもの……』

苦しい辨解は子供に一生懸命である。

『そんなお母様の事を思ふぢやない、お前のお母様は此處に居てのが左様ぢや』

『ほゝほ能く解つてるわねね……お母様が可愛がつて上げてるわねえ』

と喜代子は先刻車の上で云含めた事を忘れたら承知しないぞ…といふ意味の目で凝と見る、薫はシリ〳〵父の方へ寄つて。

『……だつて僕…お父様…お父様僕先のお母様が……』

『ほゝほ子供といふものはねね、久振りにお父様に遇ふと直に甘えるのね、さ、彼方でおばあさんが待つて被居るから行きませう、御馳走をするッて待つててのよ』

口には優しい事を云つたが喜代子の聲は憤怒に震えて居た、立上つて厭がる薫の手を引いて廣之との中を隔てると、見えぬやうに屹度睨む、睨まれて薫は悄然と歩んだ。

暫時する喜代子が戻つて來て、襖をピッタリ閉める、廣之の傍へ嬌めかしう座つたが其顔は男に反けて。

『モウ可いわね、モウ可いでせうあれで、堪能して?』

『はゝゝ相變らず妙に疑ぐるですな』

『當然だわ』

と向き直る。

『澤子さんの事を思ひ出したら可いわね、どれ位ゐ想ひ出して……結婚當時の事？、ね、あの子が出來た時の事？』

廣之は弱つて笑つて居る。

『まあ貴郎は妾に斯な厭な思ひをさせて笑つて居るの……妾を斯なに侮辱して貴郎愉快なの……チエッ妾口惜しわ』

パリヽと音して薄紅梅の半巾が両片になる、一つは廣之の膝に投げられた。

『貴郎は暫時の間に心が代つてるわ、いヽえ代つて居るわ、鑛山には鬼見たいな工夫が居るッて貴郎の心も鬼の樣になつたのね、アヽ、貴郎恐しいわ妾……』

袖を咬んで俯伏すと、匂やかな束髪の膨らんだ廂が男の膝になぶられる。

『喜代代さん、鑛山で燒けて眞黑になつて歸つた俺のそれが歡迎ですかね』

慰めるには餘りに猛烈な擧動を逆に觸つて見る。

『だつて……だつて……そんなら彼の兒何かして了つて下さいよ』

(四六)

薫を道具に遣つて廣之に近づいた喜代子は、廣之と人知らぬ關係を有つ今になつては薫が邪魔になる事をツク〴〵と思つた、飽くまで我に反抗する薫は父に對つて何な告口をするかも知れぬ、實の母に對する父の愛を回復さすべく怜悧な少年はいかなる事を爲るかも測られぬ、と思ふと自己が地位の不安なを怖れすには居られない『あの子を何かして下さい』と云つたのは彼の本音であつた、猶男の心が恨めしいといふ風にさめ〴〵と泣いた。

『……妾今日までは出來る限りの力を薫さんに注いで來たのですよ、妾自分の生んだ子ならあの半分も出來ないだらうと思ふ程努めて居るのよ……それに貴郎は妾の心を些とも知つて下さらないんだもの、左樣ぢやありませんか妾の保護でも足りない樣に貴郎は彼の子の事ばかり心配して被居るわね、今日だつて忙がしい中に何も彼の子を態々見ないでもの事ぢやありませんか、……そして彼の子にあんな……折角忘れて居る物を想ひ出させる樣な事を仕向けるんだもの……貴郎は妾の感情を弄んで愉快に思つてらつしやるのだから……』

『はつはゝゝゝそんな、そんな事があるものですか、俺にそんな精神が……』
『無いのなら無い様に證據を見せて下さい、妾の安心する様に保證を與へて下さいよ』
『何な事でもしますよ、何な事をしたら貴女の心が鎮まるのです』
『今スグに結婚の式を擧げて下さるか、それが出來なければ今云つた彼の子を此際何かして下さいよ』
『結婚式を？はゝゝゝ貴女にも似ぬ事を云ふ、今スグに出來る樣な無雜作な結婚式で貴女は滿足しますかね、地中の黃金はまだ俺の鍬の先には引かゝつて居ませんよ、戀の成功を飾る富はまだお互ひに握られて居ませんよ』
喜代子は漸解けた顏にチッと笑みを見せて。
『だつて……貴郎の樣な方を…妾不安だから、そんなら子供の所置をして下さい、妾彼の子を愛すればこそ引取つて保護して居るのだけれど、彼の子の爲に貴郎が絕えず妾の厭な事を聯想する樣ぢや妾だつて自分の戀の爲に防衛しなけァならぬわ』
『子供は既に貴女に一任してある、貴女が何うしやうと自由ぢやありませんか俺は干涉しないから』

『貴郎眞に干涉しないの、妾の自由にしても後になつて貴郎決して何も仰有らないの？』
『俺は當初から貴女に左樣云つて置いた筈ぢや』
『けど何と云つても親子の愛情といふものには貴郎だつて捉へられて居るわ、逢ひたいのが左樣ぢやありませんか』
『捉へられては居ない……其證據には俺の今の事業……鑛山の事業や貴女との結婚を遂げる爲に彼の子が邪魔になれば何なつても構はぬ、子供は欲しいと思へば何時でも出來る、俺の捉まへかけてる機會は今逃したら永刼に絕望です』
『妾もそれが成功させたいと思ふから……今度だつて妾何しても兄を說伏せる心算で居るの』
信明を通じて巽伯から更に幾干の資金を取出さうとする廣之が歸京の要事を助けるといふのである。
『無論それはお願ひしなければならぬ』
『ほゝほお願ひッて他人行儀らしいのねえ……貴郎はチョイ〳〵他人を出すから』
と何でもない詞の上に喜代子は際どく我を働かせて行く。
『それぢや貴郎薰さんは何なつても……何なつても可いといふのね妾に任せて』

他の事を考へて居る風の廣之は輕く首肯いた、彼の魂は今や幾干の投資に依て鍬打下さるゝ寶の山、その地下何千尺の底を逍遙ふて居る、それを成功さすべく巽伯や佐藤男爵の援助を得るに便ある喜代子の歡心を失うまじと努めて居る。

『屹度ね……それぢや妾彼の子他人に遣らうか知ら』

と云つて凝と廣之の顏を見た。

（四七）

薫を他人に遣るといふ喜代子の詞には廣之も考へ事を拋つて此方を向く。

『貴郎ィッソあの子遣つてお了ひなさいな他人に、其方がお互ひよりもあの子の幸福だわ、妾左樣思ふのよ』

『親子の緣を切つてですか』

と云つた廣之の聲には其事を重大に思ふといふ意味が籠つて居て、それを打破るやうに。

『はあ、左樣ですよ、其方が可いわ』

と左も事も無げに喜代子は答へて。

『貴郎、お互ひの間には隱さない感情が可いと仰有たわね、何も彼も秘密なしの約束ね』

『秘密が有ちや可けない』

『だから妾云ふわ……妾あの子と貴郎との間に父子といふ身分の關係がある間は何時までも愉快な感情を堪へなければならないから』

と判然と云つて。

『妾當初にはお母樣に離れた薫さんが可愛相でならなかつたのよ、それで妾から進んで家庭教師の資格で保護を引受けたの……だけど今ぢや貴郎の……ほゝ、貴郎と妾との事情は其當時とは違つてるわね違つてるでせう……それと一緒に彼の子に對する感情もねね……嫉妬かも知れないけど……妾あの子を通じての貴郎の感情が危險に感じられてならなくなつたの』

『又綾子を思つてるといふのですか』

喜代子は『厭ッ』といふ見得をして急に両手で耳を覆ふ眞似した。

『貴郎の口からそんな名の聞くのも堪へられない……そんな名を云はせたり思はせたりするのは皆な彼の子が居る爲だわ、貴郎を同棲する樣になつてから妾斯な苦痛を受ける樣だつら厭

よ……だから今の中にイッソ他人に遣つてお了ひなさいよ、其方が繼母となる妾よりも繼子にならぬ薫さんの爲に何程幸福だか知れないもの……それからまだ幸福があるわ、彼の子なら同族中にそれは善い所から欲しがつてる方があるのだから』

『同族中に？彼の子を貰ひ度といふ先方があるのですか』

『はあ』

『フム』と廣之は思案する。

『貴郎イッソ遣つてお了ひなさいよ、そんな幸ひな……彼の子の爲にそんな幸福な貴人がある のだから……さうして貴郎が妾を眞に愛して下さるのなら其保證を與へて下さいよ、安心させて下さいな、彼の子も幸福ならお互ひに幸福だわ……それで全く貴郎と妾との新しい理想に向ふ事が出來ると思つてよねえ貴郎』

『古い妻を去つた俺は子供を捨る事位ゐ何でも無いですが、これも俺が隱さん所です、あの子の前途が幸福にあれかしと思ふ情はあります』

『だから可いぢやありませんかそんな所があるのだもの』

『その話が纏れば遣つても可しい、俺は貴女が見る如く決してあの子に戀々するものぢやない

古い理想の母に最も能く似た彼の子の爲には俺を父とする事が餘り幸福ぢやないかも知れぬから……何か條件がありますか欲しいといふのに』

『條件ッて……唯身分が華族ですから音信不通位……それは此方だつてねえ』

『此方の名を今出すといふのぢや困るが』

『そんな事は無論だわ、當分預けて置いて時機を見て總ての手續きをするのですよ、それには妾が一切當るわ、貴郎の迷惑になつたり面倒があるやうな事爲やしないわ』

『遣らう、遣りませう』

と廣之は決心の答へを與へた。

『子供にはいくらかの情緒を惹されて居たです……併し眞に愚な事だつた、矛盾だつた、可しい、喜代子さん、貴女の自由に任せます、其所へ遣つて下さい』

『決心出來て？』

『それが決ればいよ〳〵俺と貴女二人限ぢや、新しい富と共に新しい子供も作られる、はッはゝゝゝ貴女出來るだらう』

『ほゝほ姙娠は愛の程度ですッて……屹度出來てよほゝほゝゝ』

（四八）

別莊に唯ひとり薫の消息を待つて居た直也の朱衣は喜代子の歸りを門に迎へ車上に抱かれた小さな姿を見て始めて胸を撫で下した。

座敷に入ると喜代子は薫を別莊守の女房に托して直也と對ひ合つた。

『何でしたな大野氏は、子供を見て喜んだですか』

『それはねえ』

と云つたが喜代子は何か他の事を云出さうとして居る、打凭れた態度で。

『神木さん、貴方に頼みたい事が又一つ出來たのですよ』

『僕に？、何程でも頼まれるです、一つも二つも同じ事だ、併し手數料は各種別個ですぞはッはゝゝゝ』

『皆な干聯いた事件だから厭と云はれても貴方に頼まなけれァ……他ぢやありません矢張彼の子供の事ですよ』

直也は我知らず膝を進ませる、喜代子は聲を低うして。

『妾彼の子が居ては困るのよ……、貴方は何も彼も知つて被居て妾達の味方をして頂くのだからのですよ、あんな妾に反抗する子供の母となる事は妾には迚も出來やしませんからね』

『ウムそれは困るでせう』

『察して下さいよ、だから妾此際あの子を何かしやうと思うの、貴方にお頼みしてあの子を』

『何かすると云つて……殺すかね』

と直也は平氣で云つた、喜代子は周章た色をして。

『ほゝほそんな事も出來ませんがね』

『何しやうといふのですか』

『何處か遣つて了ひたいの』

『遣るですか……、ウムそれは可いだらう』

と云つた直也の聲は高かつた。

『併し大野氏が諾しますまい、僅た一人の子といふぢやないですか』

『イヤ大野はモウ承諾させてあるのよ』

『大野氏が？左樣ですか、承諾して居るのですか……子供に對する情よりも貴女との愛が大きいのだな』

『ほゝほ左樣でもないのだけど……實際彼な子ぢや將來の家庭の平和が保れませんからねゝ』

『何處か遣る所があるのですかね』

『それを貴方にお賴みしたいのよ、神木さん彼子何處か遣つて下さいよ……貰つて呉れる所ありますまいかねえ』

『それは有る、それは條件次第で僕でも貰ふですよはッはゝゝゝ』

『條件ッて斯な事情ですから一切秘密で無ければね』

『從つて相場が高くなる』

と直也は頤を撫せつゝ乘出して。

『幾干添けるですな金は……無論金を添けるでせうな』

『それはねえ、けど餘り要求が大きくつては困るわ』

喜代子は此前に取られた五百圓に懲りて居るのであるが、さりとて秘密を握られた此男の外に

斯な相談が何處へも持つて行れるものではない。

『それは先方の要求に依て定めるとして僕急に探しませうか』

『左樣して下さいよ、あの子が居なくなつたら貴方も厄介がなくなるわね』

『左樣だ、僕早速探すです……ナニ金さへ添けて遣れば貰人は困る程ある』

『ナル可く東京でなくて遠い所が可いのだけれど……』

『遠い所が可ければ朝鮮でも支那でも、ズッと飛んで阿米利加か……更に飛離れて十萬億哩の遠い所へ遣つたら貴女の爲には大いに安全な譯だはッはゝゝは、何ですイッソ後の憂慮を斷つ爲に思切つて最後の奴にしたら』

と直也は相手の顏を覗き込む。

『最後のッて何う？』

『十萬哩のさ、貴女の邪魔になる小童の姿を此世から消すのですよ……』

『……そんな事をしたら』

喜代子は身を縮める樣にソッと後を顧た。

『神木さん、そんな事をしたら此方が危ないわねゝ』

直也は事も無氣に笑つた。

『はッはゝゝゝ、貴女は自分の事業の爲にモウ少し闇黑世界の消息に通じなけァ可ん、法律に觸れる樣な野暮な方法ぢやなくッて人間の姿を搔き消す位ゐの事は所謂朝飯前の仕事で引受けて呉れる奴が何處にでも居るですからな』

(四九)

新い氣分と五色の酒を味はうところの、何とかの酒場といふのが湯嶋天神下に出來て空に星の燦めく夕方から輕い靴音が可なり彩硝子の扉を出つ入りつする、瓦斯の燃える下夏の草花を盛り上げた裂飾鉢を置いた圓卓子を取圍んで今しも五人の客が輕い醉の面を見交しつゝ、快く語つて居る、椅子に横樣に乘つて合服の細い袴の脚を重ねた紳士風の一人は年長者といふ尊敬を拂はれて居るのたらう、唯ひとり松岡さんと呼ばれて『君』と『僕』との混亂れた對話の中に其人の詞たけが沈默で迎へられる。

『宍戸君にして消息を知らんと云へば他の諸君ぢやァ判るまいね、何處へ先生又韜晦したのかねゝ實に惜いものだ』

『左樣です、榊とは僕がマア一番意氣合の友で長く交際してるのですから……』

と答へたのは此松岡學士と共に嘗て直也の田園生活を訪ひ、巽伯の文士招待會に彼を引張り出した宍戸良輔である。

『彼な殘念な事は無いです、先生と兩人であれ程苦心をして探し出して招待會にまで出席させたのに……彼奴メ實に酷い事をする……僕ァ何しても又捉まへなけれァ……僕を遁げやうたつて僕決して逃がしはせんです、僕が彼を唯一人の友と許す如く彼も僕の他に友を有ぬ男ですから……』

『何か內的事情があるんだね先生には、唯一人の君にも語る事の出來ぬ事情が屹度有るのだね』

松岡學士は直也の名を文壇に重からしめんが爲に彼の出身の學校の名譽を誇らんが爲に只管に盡した事が唯變名で文士招待會に出席させたといふことのみに止まるのを本意なく思つて止まぬのである。

『何の繫累も無い彼の男にそんな事情があらうとは思へないですがね、强いて考へれば永い間

遣つて居た家庭教師を急に廢した、あの邊に何か事情か潜むのかとも思はれるのですが……此前にそれを尋ねても斷じてそんな事は無いと云ふのです』

『先生には戀は無いと云つたのも君だつたッけね』

『僕です、僕には左樣信じる理由があるのですから』

『あの新聞の記事ね、招待會の夜佐藤男爵の令嬢とかと榊君が戯れて居たとか何とか書いてあつた、彼な事は無論嘘だらうね』

『斷じて嘘です』

と宍戸は我事の樣に躍起になつて。

『あれはあの新聞の小説を書いてる狹山といふ男の中傷です、何でもあの晩に榊と其男とが男爵の令嬢の所で會した時酷く酒に醉つてる狹山が榊に對して無禮な事を云つたのであの氣象だから席を蹴つて歸つたのですね、それは翌日榊が僕に語つたのです、先生新聞を見て『あれだね』と云つて笑つて居たです、女と戯れるといふ樣な事は彼の男に限つて斷じて無いです、それは僕が保證します』

熱心に語る宍戸の隣席に五分刈頭に鐵縁の眼鏡、肥滿したのが居て此時口を出した。

『先生と君との話に參考となるべき或物を我輩は有つて居る、榊君の行衛に就て之が捜索の端緒にでもなれば我輩大いに光榮とする』

矢嶋といふ學生上りで、聊か酒の氣と共に面白い辯舌を始めた。

『我輩が銀行を退るのが午後四時です、向嶋の浪宅を指して一錢蒸汽船がこの腰辨先生を運ぶのですがね、毎日の事だから何の奇もない、凡々の凡たるもので、隅田の流れにペッペッと五六度唾を吐いちやァ、逝く者は斯の如き乎明日待るゝ寶船と云つた樣な、浪華節にもまだ出來てない獨語を云つちァ川を渡るのですがね、これ迄は吾輩の日記で甚だ恐縮です、事天才の詩人榊直也君に干するのはこれからですよ』

『オイ〳〵矢嶋そんなに冒頭を置かないで話さんかい、榊を見たとでも云ふのかね』

と宍戸は肩を叩いた。

『マァさう急かんでも可いさ、我輩の提供する問題が事實といふ事になるといふとだね、君に對しては甚だお氣の毒の至りであるが榊先生女嫌ひの大保證を撤回して貰はなければならないといふ……實に涙を振つて……』

『廢せッ、早〳〵後を云はんかい』